

42294

教科書文庫

4
815
42-1932
20000 40288

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

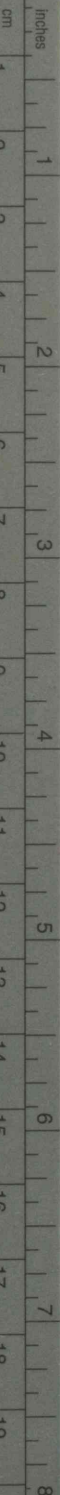


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
T011  
資料室

女子現代日本文法 全





375.9  
Toll

資料室

文部省檢定

昭和七年十月十四日 師範學校國語漢文科・高等女子學校國語科用

東京開成館編輯所編

# 女子現代日本文法

株式會社  
東京開成館藏版

女子  
現代  
日本文法





### 修正について

- 一、本書は昭和二年版の「女子現代日本文法」につき、一層文法教授の實効を擧げ得るやう、必要な修正を施したものであります。
- 一、本書は實用を旨とし、内容の正確と敘述の平易とを期し、學習者をして容易に日本文法の一般知識を修得し、自由に之を應用し得るやうに圖りました。
- 一、本書は文語と口語との文法を對照しながら説明し、兩者の異同を分明ならしむるやう特別の工夫を用ひました。
- 一、本書は學習者の理解を容易にするため、各事項につき、な



るべく實例から歸納して説明いたしました。

一、本書は日本文法中難解とされてゐる助動詞及び助詞の意義・用法並に此等の單語と活用語との接續については、特に易解を旨として説明いたしました。

一、本書の文例や練習問題は有効にして且趣味あるものを選び、學習者をして興味を感じながら文法を修得せしむるやうに努めました。

昭和七年七月

編者 白 す

# 女子現代日本文法

## 目次

第一篇 單語 (二)

第一章	總說	一
第二章	名詞	二
第三章	代名詞	五
第四章	動詞	八
第五章	形容詞	九
第六章	副詞	二
第七章	接續詞	三



第八章	感動詞	.....	五
第九章	助動詞	.....	七
第十章	助詞	.....	三
第十一章	品詞分類上の注意	.....	三

第二篇 單語 (二)

第一章	文語動詞の活用	.....	七
-----	---------	-------	---

一 活用形の名稱

二 正格活用

三 變格活用

第二章	口語動詞の活用	.....	三
-----	---------	-------	---

一 正格活用

二 變格活用

七 三 三 三 元 元 七

第三章	動詞の活用の見分け方	.....	四
-----	------------	-------	---

第四章	動詞の自他	.....	五
-----	-------	-------	---

第五章	語尾の紛れ易い動詞	.....	五
-----	-----------	-------	---

第六章	形容詞の活用 <small>附 形容動詞</small>	.....	六
-----	------------------------------	-------	---

一 形容詞の活用

二 形容動詞

第七章	用言の音便	.....	六
-----	-------	-------	---

第八章	現代文の用言についての注意	.....	六
-----	---------------	-------	---

第九章	助動詞の種類	.....	六
-----	--------	-------	---

第十章	文語助動詞の用法	.....	六
-----	----------	-------	---

第十一章	口語助動詞の用法	.....	六
------	----------	-------	---

第十二章	助詞の用法	.....	九
------	-------	-------	---

第十三章	現代文の助動詞についての注意	.....	一〇三
------	----------------	-------	-----



第十四章 現代文の助詞についての注意 ..... 一〇五

第十五章 紛れ易い品詞 ..... 一〇六

第三篇 文章

第一章 文の成分 ..... 一一四

第二章 文の成分の正序及び倒置省略 ..... 一二三

第三章 節 ..... 一二九

第四章 文の種類 ..... 一三三

一 文の構成上の種類 ..... 一三三

二 文の性質上の種類 ..... 一三四

附録 ..... 一

文法上許容スベキ事項 ..... 一

附表

代名詞一覽表

文語・口語動詞活用對照一覽表

文語助動詞活用一覽表

口語助動詞活用一覽表

動詞と文語助動詞・口語助動詞との接續一覽表





# 女子現代日本文法

## 第一篇 單語 (二)

### 第一章 總說

急がば廻れ。

月日に關守なし。

逃げた魚は大きい。

出る釘は打たれる。

我が國の言葉には、右の例の上段のやうに、文章だけに用ひられるものと、下段のやうに、日常の談話にも用ひられるものとの二種がある。この中、文章用の言葉を文語といひ、談話用の言葉を口語といふ。

文語  
口語



文 文法

右の例のは、文語も口語も、それ／＼言葉が集つて一つの纏まつた思想を表してゐる。かやうに、言葉が集つて一つの纏まつた思想を表すものを文といふ。文語の文にも口語の文にもそれ／＼一定の法則がある。文の法則を文法といふ。

〔文語〕

玉磨かざれば光なし。

智者も千慮に一失あり。

〔口語〕

猿も木から落ちる。

流れる水は腐らない。

右の例の上段の文は六つの言葉に分れ、下段の文は五つの言葉に分れる。この分れたひとつ／＼の言葉は言葉の最小単位である。言葉の最小単位を單語といふ。

單語

### 第二章 名詞

名詞

〔文語〕

紫式部は才女なり。

山の上にも櫻あり。

勤勉は幸福の母なり。

猫を逐ふより皿を引け。

〔口語〕

重盛は忠臣である。

飛行機が空を支配する。

平和な春を迎へました。

破産は臺所の隅から起る。

右の例の傍線を施した單語は、何れも事物の名を表してゐる。かやうに、事物の名を表す單語を名詞といふ。

〔注意〕 (一) お琴み心ご機嫌姉君叔父上林先生などは、物事を丁寧にいふ場合用ひる名詞である。

(二) 山々、國々、歌など、娘ども、親たちなどは、事物が多數であることを表す名詞である。

名詞の中には、事物の數量、や順序を表すものがある。

- (一) 一 十 萬 億
- 本二冊 金百圓 下駄三足 いくつ



(二)

一つめ	二番	三等	四軒目
第五回	六の巻	二の鳥居	いくつめ

右の例の傍線を施した單語の中、(一)はいくつと數量を表し、(二)はいくつめと順序を表してゐる。これらも廣い意味では物の名であるから、やはり名詞である。かやうに、事物の數量や順序を表す名詞を特に數詞といふことがある。名詞は文語でも口語でも變りがない。

練習

- 次の文から名詞を抜き出しなさい。
- (一) 昭和の聖代に於ける國民は、須らく勤儉の美風を養成すべし。
  - (二) 春の花には、淡い白色の勝つたものが多い上に、花瓣が急に開く傾がある。
  - (三) 日本語は二千年近い記録を有してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。

である。

- (四) 着物の紋所は、先祖を崇び系圖を重んずる我が國風から起つたもので、世界に類のないものである。而もその意匠に現れた嗜好にも、日本人の國民性がほのかに見える。
- (五) 猫のあたまに紙袋、すつぼり被せて踊らせう。炬燵の上からすつてんとん、轉げて落ちると鈴が鳴る。

第三章 代名詞

〔文語〕

われはかれを呼べり。  
 これとそれとを買はむ。  
 こゝかしこを散歩せり。  
 あちこちと奔走したり。

〔口語〕

あなたと遊ぶ。  
 あれにしよう。  
 そこに鳩がゐます。  
 そちらへ行きませう。

○むはんとも書  
 く。以下凡べ  
 て同じである。



代名詞

人代名詞

自稱  
對稱  
他稱  
不定稱

右の例のわれかれあなたは人の名の代りに、これそれあれは事物の名の代りに、こゝかしこそこは場所の名の代りに、あちこちそちらは方角の名の代りに用ひられる單語である。かやうに、事物の名即ち名詞の代りに用ひられる單語を代名詞といふ。代名詞には人代名詞と指示代名詞との二種がある。

●人代名詞

人の名の代りに用ひられる代名詞を人代名詞といふ。人代名詞は、その代用される人の自他定不定によつて、自稱對稱他稱不定稱に區別される。

自稱對稱他稱はそれ／＼第一人稱第二人稱第三人稱といはれることがある。

わたくしどもあなたがた汝らおまへたちなどは、人の多數であることを表す代名詞である。

指示代名詞

近稱  
中稱  
遠稱  
不定稱

●指示代名詞

事物の名の代りに用ひられる代名詞を指示代名詞といふ。指示代名詞は、その指示する事物場所方角の遠近定不定によつて近稱中稱遠稱不定稱に區別される。代名詞には文語と口語とで語の異なるものがある。それは巻末の代名詞一覽表に示してある。

練習

次の文から名詞及び代名詞を抜き出しなさい。

- (一) かれの名譽はわが校並にわれら一同の名譽なり。
- (二) 吾が友はいづち行きけん筑波ねのあなたこなたに求めかねつも。
- (三) 私の父はこの山とあの山とを越えて、あちらの村へ行きました。
- (四) 誰が風を見たでせう。あなたも私も見やしない。けれど樹立が頭をさげて、風は通り過ぎて行く。



### 第四章 動詞

〔文語〕

蝶は舞ひ、鳥は歌ふ。

賤が伏屋に月もさす。

能ある鷹は爪を隠す。

〔口語〕

堅い木も折れる。

朝は五時に起きる。

母の病氣で心配する。

動詞

右の例の傍線を施した單語の中、舞ひ、歌ふ、さす、隠す、折れるは自然物の動作、起さるは人の動作、心配するは心の動作を表し、またあるは事物の存在を表す單語である。かやうに、事物の動作や存在を表す單語を動詞といふ。

〔注意〕 文語の動詞と口語の動詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から動詞を抜き出しなさい。

(一) 手の舞ひ足の踏む所を知らず。

(二) 春は花咲き、夏は茂り、秋は實り、冬は眠る。

(三) 風が吹く、花が散る。蝶々のやうに花が舞ふ。

(四) 蟲が啼く、蟲が啼く。月の光の照る庭に、ころ／＼と蟲が啼く。

さや／＼ゆれる葉末から、蟲の啼くのが嬉しいか、さら／＼

と露が散る

### 第五章 形容詞

〔文語〕

山高く水清し。

日暮れて道遠し。

貧は病より苦し。

〔口語〕

噂は風より早い。

夏は暑く冬は寒い。

渡る世間に鬼は無い。



形容詞

右の例の傍線を施した單語は、いづれも事物の有様を表してゐる。かやうに、事物の有様を表す單語を形容詞といふ。

注意 文語の形容詞と口語の形容詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から形容詞を抜き出しなさい。

- (一) 帶に短く、襷に長し。
- (二) 朋友は得ること難く、失ふこと易し。
- (三) 賤しい人にも貴い行がある。
- (四) 日の暖い晝の庭、赤い毛絲のちび靴が、椿の枝にほしてある。鳴きくたびれた鶯が、巢とまちがへて晝寝した、赤い小さい毛絲靴。

以上述べた單語の中、名詞と代名詞とは事物の本體を表すものであるから、これを總稱して體言といひ、動詞と形容詞とは體言の作

體言

用言

用を表すものであるから、これを總稱して用言といふ。

第六章 副詞

〔文語〕

全軍殆ど亂る。  
 病勢頗る重い。  
 腕力殊に強い。  
 風ますく烈し。

〔口語〕

林檎は實にうまい。  
 形がずつと大きい。  
 何事もしつかりやれ。  
 仕事がなかく苦しい。

右の例の傍線を施した單語は、何れも下の點を施した用言を修飾してゐる。かやうに、用言を修飾する單語を副詞といふ。

〔文語〕

(一) いと靜かに歩む。

〔口語〕

(一) 極ゆつくりやれ。



- (一) 僅かに五里の道なり。
- (二) 容貌恰も猿のごとし。
- (三) げに都會は便利なり。

- (一) たつた一秒の差だ。
- (二) 私はきつと負けない。
- (三) 畢竟あなた正しい。

右の例の、(一)のいと極はそれ、(二)の僅かに、たつたはそれ、(三)の下の點を施した體言を修飾し、(四)の恰もきつとはそれ、(五)の下の點を施した語句を修飾し、(六)のげに畢竟はそれ、(七)の下の點を施した文を修飾するもので、何れも副詞である。

かやうに、副詞は他の副詞を修飾し、または體言語句文を修飾することがある。  
主。に。用。言。を。修。飾。し。時。と。し。て。は。他。の。副。詞。體。言。語。句。文。を。修。飾。す。る。單。語。を。副。詞。と。い。ふ。  
副詞の用法は文語でも口語でも變りがない。

副詞

練習

次の文から副詞を抜き出しなす。

- (一) 鳥の聲いと長閑かに聞ゆ。
- (二) 病人はなるべく親切に看護すべし。
- (三) 午砲がどんと鳴ると、急にお腹がすくやうに感じます。
- (四) ちよろ／＼流れる谷川の音につれて、蟲の音が微かに聞えて来る。
- (五) お庭の池の青い水、こは／＼そつと覗いたら、白い金魚がをりました。

第七章 接續詞

〔文語〕

花及び月を眺む。

〔口語〕

行くか、それとも歸るか。



接續詞

地理又は歴史を読む。  
勤めよ。然らば安全なるべし。

彼は華族なり。されど行動は平民的なり。

風が吹く、それに雨も降る。母が不在です。でも學校には出席します。可なり勉強した。だから入學試験にも合格した。

右の例の傍線を施した單語は、何れも上下の語句や文を結びつけてゐる。かやうに、上。下。の。語。句。や。文。を。結。び。つ。け。る。單。語。を。接。續。詞。と。い。ふ。

接續詞の用法は文語でも口語でも變りがない。

練習

次の文から接續詞を抜き出さない。

(一) 彼は茶の湯生花及び音楽を學べり。

- (二) 茶並に生絲は我が國の二大輸出品なり。
- (三) 叔父は獨逸若しくは英國に留學すべし。
- (四) 中部は地味肥沃なり。従つて米穀を多く産す。
- (五) 入場者は袴を着用すべし。但し婦人はこの限にあらず。
- (六) 承諾するか、それとも拒絶するか。
- (七) 氣候もよいし、それに交通も便利だ。
- (八) 父は病氣だ。それでも至つて元氣がよい。
- (九) 今年も随分勉強した。だが、やはり駄目だった。
- (一〇) 明日が遠足です。尤も雨天の節は中止します。

第八章 感動詞

〔文語〕

いざ、行かむ。

〔口語〕

あ、いた(痛)



感動詞

あな、うらやまし。

あゝ、かなしいかな。

いざや、歌はん、諸共に。

あはれ、めでたき月かな。

あら、お珍しい。

さあ、参りませう。

おつと、あぶない。

はい、承知しました。

右の例の傍線を施した單語は、主に感情の動く時に發するものである。かやうに、主に感情の動く時に發する單語を感動詞といふ。感動詞の用法は文語でも口語でも變りがない。

感動詞(技感動詞)

練習

次の文から副詞、接續詞及び感動詞を抜き出しなさい。

(一) あはれ、めでたき今日の日や。 あはれ、樂しき今日の日や。 <sup>感</sup>いざ、もろ

とも、にうちつどひ、君が八千代を歌はばや。

(二) ねえ、あなたがそのおつもりなら、願つてもない幸いです。 <sup>感</sup>きつとそれ

を實行させよう。 しかし、いざ實行するといふまでは、誰にも洩さな  
いやうにさせよう。

(三) そよ／＼渡る春の風、「おや、もう春がやつて來た。 いよ／＼俺の世  
界だ。」と、穴を出て來た青蛙、顔にひいやり落ちたのを、何かと見  
れば春の雪、「おゝ冷たい。」と頭をば、抱へて穴へ逃げもどる。

第九章 助動詞

助動詞は接續詞を表し、助動詞の動作が完了するまで、  
体言ニ添へる場合、助動詞ニ添へる場合

〔文語〕

字を書か

妹を呼ば

人を誘は

舟を漕が

ず。

む。

しむ。

〔口語〕

字を書か

妹を呼ば

人を誘は

舟を漕が

う。

ない。

せる。

捨ます(一)  
家を(一)  
努力致ます(一)  
ず(打消)  
止(未来)  
止(便役)



ぬ(現在完了)

只今(今)動作を終了シ

タコトヲホス

たり(現在)

けり(過去)

助動詞

遅刻し  
門を閉ぢ  
塵を捨て  
試合を見  
ぬ  
たり  
けり

遅刻し  
門を閉ぢ  
塵を捨て  
試合を見  
た

右の例の傍線を施した單語は、主に動詞に附屬してその意味を補助してゐる。かやうに、主に動詞に附屬してその意味を補助する單語を助動詞といふ。

〔文語〕

〔口語〕

雨は降らざるべし。

父は歸りますまい。

今年もまた豊年なり。

これが私の家だ。  
です。

右の例の傍線を施したもののやうに、助動詞は更に他の助動詞に結びつくことがあり、また稀には體言に結びつくこともある。

注意

文語の助動詞と口語の助動詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から助動詞を抜き出しなさい。

- (一) やがて藤の花も咲かむ。
- (二) 信用は無形の財産なり。
- (三) 父は食後の散歩を怠らず。
- (四) 缺席する場合には必ず届出づべし。
- (五) 忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫に見えず。
- (六) 詩かぬ種は生えぬ。
- (七) 孝子は人に譽められる。
- (八) 姉が妹に着物を洗はせる。
- (九) 石の上にも三年。といふ諺があります。
- (十) 自分の力の足りない時、人は色々のさもしい心持を経験するものだ。



第十章 助詞

〔名詞代名詞にづくもの〕

が花が咲く  
の 重なる山  
に 東京に歸る  
を花を折る  
と 西へ向く  
へ 西へ向く  
から 宜い出る  
より 海より深く  
て 船で行く

〔文語〕

櫻の花。  
月と花と雪。

右の例の傍線を施した單語は、何れも體言に添はつて、他の單語との關係を表してゐる。

〔文語〕

風烈しくとも行かむ。  
競技を見物せずして歸る。

右の例の傍線を施した單語は、何れも用言や助動詞に添はつて、他の單語との關係を表してゐる。

〔文語〕

神ぞ見む。

〔口語〕

空から落ちる。  
缺で切る。

〔口語〕

風が烈しくても行かう。  
差支があるから缺席する。

〔口語〕

今度こそ行かう。

ニまといは助詞形容

詞にづくもの

は行かば逢はむ

とも均せむとも叶は

助詞

ても見てもはあま

に花はさけるに訪ふ人も

たり

のにふせといふのはやめたい

が 月を特ぢーか出せりき

つ、妙喜を聞きつづふを眠る

なみろ 居たかろ 富士の山領

を賦める

悪事をすな。

面白き景色かな。

右の例の傍線を施した單語は、種々の語に添はつて、意味を強め、または禁止・疑問・感歎などの意を表してゐる。  
單語に添はつて他の單語との關係を表し、またはその働を助ける單語を助詞といふ。

練習

三種々の語につくもの

練習

は 鯨は魚であらうが、  
も 草も木も靡く  
か 朝鮮は行く  
そ 花をさき匂へ

次の文から助詞を抜き出しなさい。

(一) 品性は人の鏡なり。

(二) 瓜の蔓に茄子はならぬ。

(三) 我こそは天下第一の名僧よ。

そこに誰も居らぬか。  
今日はよいお天気ですね。  
ミテ、今こそ行くな。

さ、雨さ、かけ水り

か、京都は行く

そ、花をさき匂へ

ばかり、蔓はかりなり

よ、さき事さうしよ

な、わめく、思は

な、わめく、思は



- (四) 花より外に知る人もなし。
- (五) 人に高下なく、心に高下あり。
- (六) 手に取るなやはりに野に置け蓮花草。
- (七) 世間は廣いやうで狭い。
- (八) 一寸の蟲にも五分の魂。
- (九) 千丈の堤も蟲の穴から崩れる。
- (十) ようこそお出で下さいました。

### 第十一章 品詞分類上の注意

品詞

以上述べた名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞・助詞の九つを、それ／＼品詞といひ、總稱して九品詞といふ。單語は常に或一つの品詞だけに屬するものでなく、その意味・用法などの變るにつれて他の品詞に變るものであるが、次に擧げる事

柄に注意すればその區別を誤る恐はない。

#### 一 名詞と他の品詞との區別

- (一) 太陽の光を認める。  
軒端に忍しのぶが生えてゐる。  
星が光りだした。
- (二) 堪へ忍ぶことが肝要である。

右の例の傍線を施した單語の中、(一)は事物の名を表してゐるから名詞、(二)は事物の動作を表してゐるから動詞であるが、かやうな場合には、名詞には、をがのになどの體言に結びつく助詞が結びつけられ、動詞にはそれが結びつけられない。

#### 二 副詞と他の品詞との區別

- (一) 修飾限定  
ゆめ忘るべからず。副詞  
つゆ知らず。

名詞と他の品詞との區別

紅葉  
もみぢく  
收穫  
みづみ  
霜露

副詞と他の品詞との區別



接續詞と他の品詞との區別

(一) 悲しき夢を見たり。  
(二) 草葉の露に裾も濡れけり。  
右の例の傍線を施した單語の中、(一)は下の語句を修飾してゐるから副詞、(二)は事物の名を表してゐるから名詞である。

(一)それはあまり悪いことです。  
(二)お金があまりりました。

右の例の傍線を施した單語の中、(一)は下の語句を修飾してゐるから副詞、(二)は事物の動作を表してゐるから動詞である。

接續詞と他の品詞との區別

(一) 山また山を越ゆ。  
書を讀み且字を習ふ。  
風がまた吹いて來た。  
(二) かつ走りかつ戰ふ。

感動詞と他の品詞との區別

右の例の傍線を施した單語の中、(一)は上下の語または文を結びつけてゐるから接續詞、(二)は下の語句を修飾してゐるだけであるから副詞である。

感動詞と他の品詞との區別

(一) それ自動車が來た。  
あれ、あぶない。  
それはあなたの名譽です。  
(二) あれを買ひませう。  
あれ今年も秋に有りぬ (感動詞)  
もの、あはれは秋に勝利 (名詞)

右の例の傍線を施した單語の中、(一)は感動の意を表してゐるから感動詞、(二)は事物の名の代りに用ひられてゐるから代名詞である。

助詞と他の品詞との區別

(一)もう十里くらゐ歩いたらう。  
(二)彼の父は位が高い。

助詞と他の品詞との區別



右の例の傍線を施した單語の中、(一)は十里といふ體言に添はつて、他の單語との關係を表してゐるから助詞、(二)は事物の名を表してゐるから名詞である。

練習

次の文の傍線を施した單語は何品詞に屬しますか。

- (一) 長男の廣は割合に心の廣い子です。  
代名詞 指示代名詞 動詞
- (二) 霞のために野も山も一面に霞むのは面白い。  
動詞
- (三) 聖人の誠を忠實に守れと父が子供を誡めた。
- (四) 私は常に公と私との區別をはつきりしたいと思つてをります。  
代名詞
- (五) それあぶないと注意したけれども、時機を失してそれもこれも駄目となつた。

第二篇 單語(三)

第一章 文語動詞の活用

夕行の同一行トアイウエノ各段ニ  
互ニ活用スル動詞ヲ四段子活用ノ  
動詞トイフ

(一) もろともに死なむ。

(第一活用形)

(二) ことごとく死に絶えたり。

(第二活用形)

(三) 毒を飲めば死ぬ。

(第三活用形)

(四) 將士ともに死ぬる覺悟を有す。

(第四活用形)

(五) 祖父も父も死ぬれば子相續す。

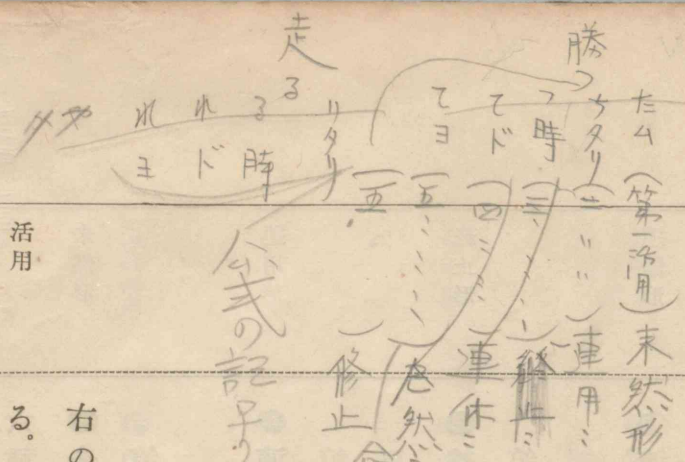
(第五活用形)

(六) いさぎよく死ぬ。

(第六活用形)

右の例のやうに、死ぬといふ動詞はその語形がいろくゝに變化する。かやうに、語形の變化することを活用といひ、活用のおのゝの形を活用形といふ。活用形には右に擧げた六種がある。

活用形





志見書

一 活用形の名稱

六種の活用形にはそれぞれ特別の名稱がある。

① 未然形

第一活用形は「もろともに死なむ」のやうに、動作が未だ成立しない意味を表す形であるから、これを未然形といふ。

② 連用形

第二活用形は「死に絶え」のやうに、用言に連なる形であるから、これを連用形といふ。

③ 終止形

第三活用形は文章が終止する場合に用ひられる形であるから、これを終止形といふ。

④ 連體形

第四活用形は「死ぬる覺悟」のやうに、體言に連なる形であるから、

未然形

連用形

終止形

連體形

已然形

命令形

四段活用

これを連體形といふ。

⑤ 已然形

第五活用形は「父も死ぬれば子相續す」のやうに、動作が已に成立した意味を表す形であるから、これを已然形といふ。

⑥ 命令形

第六活用形は命令の意味を表す形であるから、これを命令形といふ。

二 正格活用

① 四段活用

	讀				
	ま	み	む	む	め
ア段					
イ段					
ウ段					
エ段					
オ段					
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
	命令形				



未然形 書を讀まむ。  
 連用形 書を讀み果てたり。  
 終止形 書を讀む。  
 連體形 書を讀む暇なし。  
 已然形 書を讀めば知識を増す。  
 命令形 書を讀め。

右の例のやうに、讀むといふ動詞は五十音圖の「ア・イ・ウ・エ」の四段に活用するから、これを四段活用の動詞といふ。

練習

次の動詞の活用を述べなさい。  
 勝つ 走る 飛ぶ 書く 笑ふ 打つ 結ぶ 開く 歩む 散る 破る 囁く

結ぶ

上一段活用

●上一段活用

	(見)	
イ	み	未然形
	み	連用形
	みる	終止形
	みる	連體形
	みれ	已然形
段	みよ	命令形

未然形 試合を見む。  
 連用形 試合を見たり。  
 終止形 試合を見る。  
 連體形 試合を見る人少し。  
 已然形 試合を見れば面白し。  
 命令形 試合を見よ。

右の例のやうに、見るといふ動詞は五十音圖の「イ」の一段だけに活



用するから、これを上一段活用の動詞といふ。

**練習**

次の動詞の活用を述べなさい。

着る 似る 煮る 射る

上二段活用

③ 上二段活用

	起				
イ	き	未然形	き	連用形	き
段	き	連用形	く	終止形	く
ウ	くる	終止形	くる	連體形	くる
段	くれ	連體形	くれ	已然形	くれ
イ	きよ	已然形	きよ	命令形	きよ
段		命令形			

未然形 早く起きむ。

連用形 早く起き出でぬ。

終止形 早く起く。

連體形 早く起くる人は稀なり。

已然形 早く起くれば心地よし。

命令形 早く起きよ。

右の例のやうに、起くといふ動詞は五十音圖のイウの二段に活用するから、これを上二段活用の動詞といふ。

**練習**

次の動詞の活用を述べなさい。

落つ 閉づ 強ふ 懲る

下二段活用

④ 下二段活用



		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
エ	蹴 <sup>け</sup>	蹴	け	ける	ける	けれ	けよ
		蹴	け	ける	ける	けれ	けよ
段							

未然形 鞠を蹴む。

連用形 鞠を蹴たり。

終止形 鞠を蹴る。

連體形 鞠を蹴る人はなきか。

已然形 強く蹴れば高く飛ぶ。

命令形 鞠を蹴よ。

右の例のやうに、蹴るといふ動詞は五十音圖のエの一段だけに活用するから、これを下一段活用の動詞といふ。

下一段活用に屬する動詞は蹴るの一語だけである。

**注意** 未然形の蹴むは現代文では殆ど用ひられない。

下二段活用

⑤ 下二段活用

下二動一ウ(ルレ)

		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
エ	忘	れ	れ	る	る	るれ	れよ
		れ	れ	る	る	るれ	れよ
段							

未然形 怨を忘れむ。

連用形 怨を忘れ果てたり。

終止形 怨を忘る。

連體形 怨を忘るゝ人多し。

已然形 怨を忘るれば禽獸に同じ。

命令形 怨を忘れよ。

右の例のやうに、忘るといふ動詞は五十音圖のウエの二段に活用するから、これを下二段活用の動詞といふ。







	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
エ段	イ段	ウ		段	エ段	

未然形 運動をせむ。

連用形 運動をしたり。

終止形 運動をす。

連體形 運動をする人は健康なり。

已然形 運動をすれば心地よし。

命令形 運動をせよ。

右の例の爲といふ動詞のやうに、五十音圖のイ・ウ・エの三段に活用するものをサ行變格活用の動詞といふ。

サ行變格活用に屬する動詞は爲の一語だけである。

(サ行三段活用)

注意 サ行變格活用はまたサ行三段活用ともいふ。

出發す 勉強す 練習す 正しうす 全うす 罪す  
 右の例のやうに、爲は他の語と結びついて、やはりサ行變格活用と  
 なることが多い。

練習

次の動詞の活用を述べなさい。

議論す 辱うす 賞す 歸着す 恣にす 論ず 遅しうす  
 高くす 新にす

③ ナ行變格活用

ナ行變格活用

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ア段	イ段	ウ		段	エ段	



未然形 早く往なむ。  
 連用形 早く往にたり。  
 終止形 彼も往ぬ。  
 連體形 また往ぬる人あらむ。  
 已然形 人々往ぬればいと寂し。  
 命令形 早く往ね。

右の例の往ぬといふ動詞は五十音圖のアイウエの四段に活用するが、その連體形と已然形とが四段活用と異なるから、これをナ行變格活用の動詞といふ。

ナ行變格活用に屬する動詞は死ぬ往ぬの二語だけである。

【注意】 ナ行變格活用の活用形はみな語形を異にする。

ラ行變格活用

④ ラ行變格活用

カ 未(ツケ)  
 ナ 変(ス) 死ね往ね  
 ラ 変(ス) 終(ス) 上(ス) 形(ス) 切(ス)

ラレテラル居ヌ

有リ居リ待リ

(現代大に如ど) 用(ス)行(イ)

変格活用動詞

未然形 幸運有らむ。  
 連用形 幸運有りたり。  
 終止形 幸運有り。  
 連體形 思慮有る人は少し。  
 已然形 差支有れば行かず。  
 命令形 幸運有れ。

	有	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ア段	ら						
イ段	り						
ウ段	る						
エ段	れ						
オ段	れ						

右の例の有リといふ動詞は五十音圖のアイウエの四段に活用するが、その終止形が四段活用と異なるから、これをラ行變格活用の動詞といふ。



ラ行變格活用に屬する動詞は有り<sup>ル</sup>唐<sup>ル</sup>り<sup>ル</sup>侍<sup>ル</sup>りの三語だけである。

**注意** 侍りは現代文では殆ど用ひられない。

變格活用

以上四種の動詞を變格活用の動詞といふ。

**注意** 四種の變格活用はそれ／＼カ變・サ變・ナ變・ラ變と略稱される。

### 第二章 口語動詞の活用

#### 一 正格活用

口語四段活用

#### ● 口語四段活用

未然形	咲かう。	(文語ナ變)	死なう。	(文語ラ變)
連用形	咲きます。		死にます。	
終止形	咲く。		死ぬ。	有る。

○口語動詞の第五活用形は假定形といふ。

大語動詞 ↓ 口語動詞

四変  
ナ変  
ラ変

(口語)

右の例のやうに、文語の四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用に、口語ではいづれも四段活用となる。

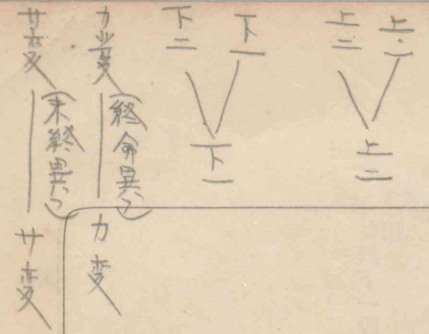
口語上一段活用

#### ● 口語上一段活用

連體形	咲く時。	死ぬ人。	有る處。
假定形	咲けば。	死ねば。	有れば。
命令形	咲け。	死ね。	有れ。

未然形	見よう。	(文語上一段)	起きよう。	(文語上一段)
連用形	見ます。		起きます。	
終止形	見る。		起きる。	
連體形	見る人。		起きる時。	
假定形	見れば。		起きれば。	





命令形 見よ。 起きよ。  
右の例のやうに、文語の上一段活用上二段活用は、口語ではいづれも上一段活用となる。

口語下一段活用

㊦ 口語下一段活用

(文語下一段)

(文語下二段)

未然形	蹴よう。	忘れよう。
連用形	蹴ます。	忘れます。
終止形	蹴る。	忘れる。
連體形	蹴る時。	忘れる人。
假定形	蹴れば。	忘れれば。
命令形	蹴よ。	忘れよ。

右の例のやうに、文語の下一段活用上二段活用は、口語ではいづれ

も下一段活用となる。

正格活用(口)

以上三種の動詞を正格活用の口語動詞といふ。

二 變格活用

口語力行變格活用

㊦ 口語力行變格活用

未然形	誰かこよう。
連用形	誰かきます。
終止形	誰かくる。
連體形	誰もくる人がない。
假定形	誰かくればよい。
命令形	誰かこい。

右の例のやうに、文語の力行變格活用は口語でも力行變格活用で



口語サ行變格活用

あるが終止形と命令形とは文語のと異なる。

●口語サ行變格活用

未然形

勉強を

せぬ。しよう。

連用形

勉強をします。

終止形

勉強をする。

連體形

勉強をする人。

假定形

勉強をすればよい。

命令形

勉強をせよ。

○命令形には世よの外にしろがあるが、本書ではこれを略した。

變格活用(口)

右の例のやうに、文語のサ行變格活用は口語でもサ行變格活用であるが、未然形と終止形とは文語のと異なる。

以上二種の動詞を變格活用の口語動詞といふ。

二種の變格活用はそれ／＼口語カ變口語サ變と略稱される。

次に文語動詞・口語動詞活用比較表を掲げる。

文語動詞・口語動詞活用比較表

文語動詞活用比較表		口語動詞(九種)		口語動詞(五種)	
四	一段活用	四	一段活用	四	一段活用
ナ	行變格活用	ナ	行變格活用	ナ	行變格活用
ラ	行變格活用	ラ	行變格活用	ラ	行變格活用
上	一段活用	上	一段活用	上	一段活用
上	二段活用	上	二段活用	上	二段活用
下	一段活用	下	一段活用	下	一段活用
下	二段活用	下	二段活用	下	二段活用
カ	行變格活用	カ	行變格活用	カ	行變格活用
サ	行變格活用	サ	行變格活用	サ	行變格活用



### 第三章 動詞の活用の見分け方

文語動詞の活用の見分け方

#### ● 文語動詞の活用の見分け方

- (一) 四段活用 咲か(ア) ず。 讀ま(ア) ず。
- (二) 上二段活用 起き(イ) ず。 落ち(イ) ず。
- (三) 下二段活用 捨て(エ) ず。 枯れ(エ) ず。

右の例のやうに、動詞がずに連なる場合に、

- (一) のやうに ア段から続くものは四段活用
- (二) のやうに イ段から続くものは上二段活用
- (三) のやうに エ段から続くものは下二段活用

である。

たゞし、次の語は記憶せよ。

- 上一段活用 着る 似る 煮る 乾る 見る 射る

口語動詞の活用の見分け方

#### ● 口語動詞の活用の見分け方

- (一) 四段活用 咲か(ア) ない。 讀ま(ア) ない。
- (二) 上一段活用 起き(イ) ない。 落ち(イ) ない。
- (三) 下一段活用 捨て(エ) ない。 枯れ(エ) ない。

右の例のやうに、動詞がないに連なる場合に、

- (一) のやうに ア段から続くものは四段活用
- (二) のやうに イ段から続くものは上一段活用

下一段活用 蹴る 居る 率ゐる

カ行變格活用

來

サ行變格活用

爲

ナ行變格活用

死ぬ

ラ行變格活用

有り

居り(侍りは現代文では殆ど用ひられない)



③のやうに エ段から續くものは下一段活用である。

たゞし、次の語は記憶せよ。

カ行變格活用 來る  
サ行變格活用 爲る

練習

- (一) 次の文語動詞の活用の種類を述べなさい。  
打つ 射る 怖づ 蹴る 治む 往ぬ 居る 信ず 埋む
- (二) 次の口語動詞の活用の種類を述べなさい。  
居る 居る 爲る 爲す 流れる 育てる
- (三) 次の文語の中、傍線を施した動詞の活用形を述べなさい。  
(イ) 汝に出づるものは汝に還る。  
(ロ) 生きたる犬は死したる虎に勝る。

自動詞

● 自動詞

〔文語〕

花咲く。  
雨降る。

〔口語〕

夜が明ける。  
日が暮れる。

第四章 動詞の自他

- (ハ) 人の是非は知り易く、己の長短は見難し。
- (四) 次の口語文の中、傍線を施した動詞の活用形を述べなさい。  
(イ) 鶉の真似する鳥は必ず水に溺れる。  
(ロ) 三年たてば三つになるといふ諺もある。  
(ハ) 細い管から吹き入れる私の息でふわ〜とふくらみあがるしやぼん玉、春の光のまん中に、飛行船のやうに走り行く。

右の例の傍線を施した動詞は、それだけで意味が十分まともまつてゐる。即ち此等の動詞は他に働を及ぼさないものである。かや



他動詞

うに。他に。働を。及。ぼ。さ。ない。動詞を。自。動。詞。と。い。ふ。

① 他動詞

〔文語〕

姉は琴を弾ず。  
妹は本を讀む。

〔口語〕

猫が鼠を捕へる。  
母が門を開ける。

右の例の傍線を施した動詞は、それだけでは意味が十分まとまらず、別にその働を受ける琴、本、鼠、門などの語を必要とする。即ち此等の動詞は他に働を及ぼすものである。かやうに、他に働を及ぼす動詞を他動詞といふ。

動詞の中には、自動詞と他動詞とその形が全く同一のものもあり、また二つの形がよく似たものもある。

〔文語〕

〔口語〕

他 自 動 詞  
— — — — —  
他 自  
— — — — —  
— (目的) 自身  
— — — — —  
— — — — —

櫻花開く。(四段……自動詞)

風が吹く。(四段……自動詞)

門を開く。(四段……他動詞)

笛を吹く。(四段……他動詞)

右の例は自動詞と他動詞とが全く同一の形のものである。

〔文語〕

〔口語〕

水 流る。(下二段……自動詞)

舟が沈む。(四段……自動詞)

水を流す。(四段……他動詞)

舟を沈める。(下二段……他動詞)

右の例は自動詞と他動詞との形がよく似たものである。

練習

〔一〕次の文語動詞を自動詞と他動詞に分け、その活用を述べなさい。

(イ) 人 渡る。  
人 渡る。  
他(口)自 山も見ゆ。  
山 見る。

他(口)自 湯 沸く。  
湯 沸す。

〔二〕次の口語動詞を自動詞と他動詞に分け、その活用を述べなさい。



- (イ) 足が進む。  
他(イ) 足を進める。
- (ロ) 人が笑ふ。  
人が笑ふ。
- (ハ) 帯が解ける。  
他(ハ) 帯を解く。
- (ニ) 次の文から動詞を抜き出し、その自他を區別しなさい。
- (イ) 去るものは之を追はず、来るものは之を拒まず。
- (ロ) 己を制することの出来る人はえらい人である。

### 第五章 語尾の紛れ易い動詞

語尾の紛れ易い文語動詞

#### ● 語尾の紛れ易い文語動詞

動詞は凡べて五十音圖の或一行だけに活用するものであるから、その何行に活用するかを知れば、動詞の假名遣を誤ることはない。

① 甲) ア行・ハ行・ヤ行・ワ行に活用する動詞

ア行	あ	い	う	え	お
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ

ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ワ行	わ	わ	う	ゑ	を

語尾の紛れ易い動詞は、右に挙げたやうに、ア行・ハ行・ヤ行・ワ行に活用するものである。

(一) ア行に活用する動詞

得

(下二段活用)

射る 鑄る

(上一段活用)

② (ニ) ヤ行に活用する動詞

老ゆ	悔ゆ	報ゆ
甘ゆ	癒ゆ	覺ゆ
肥ゆ	凍ゆ	榮ゆ
費ゆ	煮ゆ	映ゆ
吠ゆ	見ゆ	燃ゆ
		萌ゆ
		悶ゆ
		殖ゆ
		絶ゆ
		越ゆ
		消ゆ
		聳ゆ
		冷ゆ
		牙ゆ
		生ゆ
		映ゆ
		煮ゆ
		見ゆ
		燃ゆ
		吠ゆ

(上二段活用)  
(下二段活用)



(三)ワ行に活用する動詞

居る 率<sup>ひき</sup>ゐる

(上一段活用)

植う 飢<sup>う</sup>う 据<sup>た</sup>う

(下二段活用)

(四)ハ行に活用する動詞

右に挙げたものの外は大抵ハ行に活用する動詞である。

(乙)ザ行ダ行に活用する動詞

ザ行 ざ じ ず ぜ ぞ

ダ行 だ ぢ づ て ど

次に語尾の紛れ易い動詞は、右に挙げたやうに、ザ行・ダ行に活用するものである。

(一)ザ行に活用する動詞

混<sup>ま</sup>ず

(下二段活用)

論<sup>ろん</sup>ず 混<sup>ま</sup>ず 信<sup>ま</sup>ず……………など

(ザ行變格活用)

(二)ダ行に活用する動詞

右に挙げたものの外はダ行に活用する動詞である。

語尾の紛れ易い口語動詞

●語尾の紛れ易い口語動詞

以上述べたものはすべて文語動詞の場合であるが、口語動詞の場合、これによつて直ちに推測<sup>す</sup>することが出来る。例へば、文語の「犬吠<sup>い</sup>ゆ」の場合に、吠<sup>い</sup>ゆがヤ行下二段活用であることを知れば、口語では下一段活用であるから、「犬が吠<sup>い</sup>える」となり、文語の「木を植<sup>う</sup>う」の場合に、植<sup>う</sup>うがワ行下二段活用であることを知れば、口語では下一段活用であるから、「木を植<sup>ゑ</sup>る」となることが分る。

練習

〔次の文語の活用を述べなさい。〕



肥ゆ 射る 老ゆ 率ゐる 飢う 論ず 攀づ 煮る 燃ゆ  
見る 見ゆ 得

(二) 次の口語の活用を述べなさい。

甘える 植ゑる 悔いる 鑄る 混ぜる 堪へる 老いる  
迎へる 揃へる 据ゑる

### 第六章 形容詞の活用 附形容動詞

#### 一 形容詞の活用

形容詞も動詞と同じく活用するが、その種類はク活用とシク活用との二種だけである。

文語形容詞の活用

#### ● 文語形容詞の活用

ク活用	高	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
シク活用	美	しく	しく	し	しき	しけれ

未然形 山高くば登らじ。 花美しくば見む。

連用形 山高く登ゆ。 花美しく咲く。

終止形 山高し。 花美し。

連體形 山高き園なり。 花美しき園なり。

已然形 山高ければ登らず。 花美しければ愛でらる。

注 シク活用の終止形はししでなくてしである。

口語形容詞の活用

#### ● 口語形容詞の活用



○口語形容詞の第五活用形は假定形といふ。  
○口語形容詞には未然形がない。

活用	ク活用	高	未然形	○	連用形	く	終止形	い	連體形	い	假定形	けれ
活用	シ活用	美	○	く	い	い	い	い	い	い	い	けれ

未然形 ○

連用形 山が高く聳える。

終止形 山が高い。

連體形 山の高い園だ。

假定形 山が高ければ登らう。花が美しければ好かれる。

口語形容詞は終止形と連體形が文語形容詞と異なる。

**練習**

次の形容詞の活用を述べなさい。

無し 面白し 悲し(以上文語) 無い 面白い 悲しい(以上口語)

二 形容動詞

文語形容動詞

一 文語形容動詞

高(くあ)か たりりるれれ

美(くあ)か たりりるれれ

右の例のやうに、形容詞の連用形が、動詞のありに結びついてラ行變格活用となることがある。

穩(か)にあ(な)たりりるれれ  
堂々(とあ)たりりるれれ

右の例のやうに、副詞の穩(か)に堂々(とあ)などが、動詞のありに結びついてラ行變格活用となることがある。

以上の高(くあ)か、美(くあ)か、穩(か)に、堂々(とあ)たりりなどのやうに、意(い)味(み)は、形(か)格(か)。



口語形容動詞

容詞のやうであつて、活用の形式は動詞と同一のものを形容動詞といふ。形容動詞は動詞の一種である。

● 口語形容動詞

今日は穩かな日です。

海岸は涼しからうと思ひます。

口語形容動詞は右の傍線を施したもののやうに用ひられるが完全な活用形はない。

次に形容詞活用表と形容動詞活用表とを掲げる。

形容詞活用表  
(文・口)  
形容動詞活用表(文)

形容詞活用表

用活ク		活用の種類	活用の形
口語	文語		
高		未然形	○
高		連用形	ク
高		終止形	ク
高		連體形	ク
高		已然形	ク
高		假定形	ク
高		命令形	ケ

形容動詞活用表

用活クシ	
口語	文語
美	
○	シク
シク	シク
シイ	シ○
シイ	シキ
シケル	シケル

形容動詞活用表  
(語・文)

用活ク		活用の形
口語	文語	
面白か		未然形
面白か		連用形
面白か		終止形
面白か		連體形
面白か		已然形
面白か		命令形

練習

次の文から形容詞と形容動詞とを抜き出して、その活用を述べなさい。

- (一) 山高さが故に貴からず。
- (二) 心の柔和ならざる人に偉大なる人物なし。
- (三) 人の苦を見て嬉しく思ふ人の心はあさまし。



(四) 賢き婦人は家を建て、愚かなる婦人は之を毀つ。  
 (五) 静かな草の庵ほど長閑なものはない。  
 (六) 友達の楽しみには晩く行き、その悲しみには早く行くがよい。

口語一四段一助詞

大語一四段 音便

鳴まハヒイ音便

居ハヒイ音便

死ハヒイ音便

### 第七章 用言の音便

言語は、發音の便宜上、或音が他の音に變ることがある。これを音便といふ。

音便にはイ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種がある。

#### ●イ音便

動詞  
 聞きて 咲き(たり) 仰ぎて  
 それは聞いて知つてゐる。(口)  
 花が咲いた。(口)  
 天を仰いで泣く。

買ハヒイ音便

音便トハ

用言ノ語幹ノ音節ニ於

ケル子音又ハ母音便音

カ変化ニテ起ル音韻變

化(コトナリ)

石橋 運陽

竹藪 轉音

持ちまハヒイ音便

大箱 大帆 撥音便

八四 加音

轉呼音

#### 形容詞

右の例のやうに、きざりがいに変るものをイ音便といふ。  
 ざります。それは本でざります。(口)  
 悲しき。あゝ、悲しいかな。  
 難き。世に處するも難いかな。

#### ●ウ音便

#### 動詞

買ひて 争ひて  
 本を買うて歸る。  
 先を争うて走る。

#### 形容詞

軽々しく 苦しくて  
 軽々しく、振舞ふ。  
 苦しうて走れない。(口)

右の例のやうに、ひくがうに変るものをウ音便といふ。

#### ●撥音便

#### 動詞

飲みて 踏みて  
 水を飲んで山に登る。  
 夕に月を踏んで歸る。



買フ カツテ カウテ  
借ル カリテ カツテ  
二段 四段

促音便

呼びて 呼んでも答へません。(ロ)  
死に(たり) 犬が死んだので島に埋めた。(ロ)  
右の例のやうに、みびにが撥ねる音のんに變るものを撥音便といふ。

④ 促音便

動詞

勝ちて	勝つて兜の緒を締めよ。
誓ひて	成功を誓つて都に上る。
行きて	公園に行つて散歩する。
破り(たり)	やつと敵を破つた。(ロ)
歸りて	すぐ歸つて來ます。(ロ)

右の例のやうに、ちひきりが促る音のつに變るものを促音便といふ。

原音 音便

きイ

のウ

フミビン

フチノツ

(三) 雪子 鳥も 似て 能く

散らし 付 鶴 筆を 被て 立

張音 辨 個 子

(四) 風烈 烈う 散れ 毛 たい たい

弁 覆 さん と 子

以上の例にあるやうに、動詞の音便は四種あるが、形容詞の音便はイ音便、ウ音便の二種だけである。  
イ音便の時にひる、ウ音便の時にふ、撥音便の時にむの假名を用ひるのは、何れも誤である。左大章中、音便ヲ指摘セヨ

練習

(一) 道に敵直に... 真国の中、隋りぬ  
(二) 小成、安んずる人、其、何事をも究うする、これ能  
けざる、なり

一次の文の音便の種類を述べなはら。

- (イ) 負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな。イ音便
- (ロ) 彼は進んでは國家に貢獻し、退いては一家を齊へたり。
- (ハ) 買つてもウリ(瓜)といふは如何。あつてもナシ(梨)といふが如し。
- (ニ) 噛んで含めるやうに教へた。
- (ホ) 若い人の口の悪いのは聞き苦しうございます。ウ音便
- (ヘ) A子さんに逢つたらあなたのことをお尋ねなさいました。イ音便



(五) 月日は新(ま)を(ま)り  
おぼけ年(とし)年(とし)年(とし)  
急(い)う色(いろ)強(つよ)く

- (一) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。
- (イ) 先生に就(つ)ひて文法を學ぶ。
- (ロ) 酔(よ)うて歌(うた)う人の顔(かほ)の醜(みにく)さよ。
- (ハ) 讀(よ)めぬ字(じ)は何(なに)といふ字(じ)で讀(よ)ひて行(い)き。(格(か)音(おん)使(つか))
- (ニ) よふ(よ)こそお出(い)で下(くだ)さる(ら)ました。(イ(い)音(おん)使(つか))
- (ホ) 何(なに)分(ぶん)とも宜(よろ)しふお願(ねが)ひいたします。(ウ(う)音(おん)使(つか))

### 第八章 現代文の用言についての注意

恨む死ぬ居り

● 恨む(上)死ぬ(ナ)居り(變)の三語は現代文では、  
誰をも恨まず。(未然形)

死ぬ覺悟にて努力せり。(連體形)

兄は學校に行き、弟は家に居る。(終止形)

右の例のやうに四段に活用することもある。(文法上許容第一)

助動詞

シク活用の終止形

● シク活用の終止形は悪し勇ましのやうに、しであつて、ししではないが、現代文では、

彼の性質は格別に悪しし。(終止形)

汝のその覺悟は實に勇ましし。(終止形)

右の例のやうにししに活用することもある。(文法上許容第二)

● 用ふはハ行上二段活用の動詞であるが、古くは、

名君は賢臣を用ゐる。(終止形)

そは今の世にも用ゐるものなり。(連體形)

のやうにワ行上一段に活用したから、現代文でもワ行上一段に活用させても誤ではない。

### 第九章 助動詞の種類

#### ● 時の助動詞

時の助動詞

見し  
行し  
おぼけ年

1/24



完了 一定  
 上ノ動作ヲ連続  
 テ行ヒ今チニ動作  
 終了シタトトテ  
 モノデアリ

未去 完了  
 む けり たり ぬり たり  
 (文) (文) (文) (文) (文) (文)

受身の助動詞

〔文語〕  
 やがて花も咲かむ。  
 彼は將來發達せむ。  
 既に櫻花も散りき。  
 妹も學校に行きけり。  
 我は手紙を書き終へつ。  
 父は叔母の家を訪ひぬ。  
 我等は動物園を見たり。  
 姉は今日單衣を縫へり。

〔口語〕  
 咲かう。  
 發達しよう。  
 散つ  
 行つ  
 終へ  
 訪う  
 見  
 縫つ

右の例の文語のむきけりつぬたりりと、口語のうようたとは、何れも時間に關係することを表すから、これを時の助動詞といふ。

●受身の助動詞

〔文語〕

〔口語〕

全生車可也  
 行める

先生可國語  
 先生可國語  
 先生可國語  
 先生可國語

使役の助動詞

る せる  
 (文) (文)  
 らる せらる  
 (口) (口)

可能の助動詞

れる せらる  
 (口) (口)  
 られる せられる  
 (文) (文)

る せる  
 (文) (文)  
 らる せらる  
 (口) (口)

可能の助動詞

れる せらる  
 (口) (口)  
 られる せられる  
 (文) (文)

使役の助動詞

す せす  
 (文) (文)  
 さす せさす  
 (文) (文)

兄は父に叱られる。  
 我は委員に選舉せられる。  
 右の例の文語のるらると、口語のれるられるとは、何れも他から或動作を仕向けられる意を表すから、これを受身の助動詞といふ。

●可能の助動詞

〔文語〕

〔口語〕

論語は我にも讀まれる。  
 こゝよりも見物せられる。

右の例の文語のるらると、口語のれるられるとは、何れもそのものかたで爲し得る意を表すから、これを可能の助動詞といふ。

●使役の助動詞

〔文語〕

〔口語〕

母は子に手紙を書かす。

書かせる。







あるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひられたのである。

〔文語〕

母も参りさふらふ。

参ります。

〔口語〕

右の例のさふらふは、もと動作を鄭重にいふ動詞であるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひられたのである。かやうな場合に、口語ではますを用ひる。ますは口語特有の助動詞である。

六 打消の助動詞

〔文語〕

風も吹かず。

我は人と争はず。

彼は山に登るまじ。

友は學校に居らざりき。

〔口語〕

吹かぬ。吹かない。

争ふまい。

登るまい。

居らなかつた。

右の例の、文語のずじまじざりと、口語のぬないまいなかつとは、何

打消の助動詞

す (文) じ (文) まじ (文) ざり (文) ぬ (口) ない (口) まい (口) なかつ (口)

推量の助動詞

む (文) らし (文) けむ (文) らむ (文) べし (文) う (口) よう (口) らしい (口) やうだ (口) やうです (口) さうだ (口) さうです (口)

れも動作の意味を打消すものであるから、これを打消の助動詞といふ。この中、じまじまいの三語は、動詞の意味を直接に打消さないで、多少推量つて打消す助動詞である。

七 推量の助動詞

〔文語〕

辭書は本箱にあらむ。

恐らく彼は出席せむ。

霰降るらし。

いかなる話なりけむ。

しづ心なく花の散るらむ。

月も出づべし。

〔口語〕

あらう。

出席しよう。

降るらしい。

誰か来るやうだ。

誰か来るやうです。

風が吹きさうだ。

風が吹きさうです。

右の例の、文語のむらしけむらむべしと、口語のうようらしいやう



だやうですさうださうですとは、何れも事物を推量つていふ意を表すから、これを推量の助動詞といふ。この中、けむは過去の事物を推量する場合にだけ用ひられる。

【注意】

(一) 文語助動詞けむらむべしに對する口語助動詞はない。

(二) やうだやうですさうださうですは口語特有の助動詞である。

この中、やうですさうですはやうださうだより丁寧な言ひ方である。

(三) むうようは時、推量の二様に用ひられるが、これらは何れもその意味によつて區別すべきである。

べしは、推量の外に、命令、決心、可能などの意を表すこともある。

(一) 午前八時まで登校すべし。

(二) 如何にしても合格し申すべし。

(三) 電話ならば直ちに消息を通ずべし。

べから

23  
25

希望の助動詞

たし (文)  
まほし (文)  
たい (口)  
たから (口)

右の例の傍線を施したべしの中、(一)は命令の意を表し、(二)は決心の意を表し、(三)は可能の意を表す。

(一) 勢當るべからず。

(二) 人を侮るべからず。

右の例のべからはべしとありとが結びついて出來た助動詞であるが、現代文では、(一)のやうに可能の意を表す外は、(二)のやうにずの上にあつて禁止の意を表すことが多い。

希望の助動詞

〔文語〕

早く故郷に歸りたし。

健康にてあらまほし。

〔口語〕

歸りたい。

試合が見たからう。

右の例の、文語のたしまほしと、口語のたいたからとは、何れも希望の意を表すから、これを希望の助動詞といふ。



指定の助動詞

たり (文)  
なり (文)  
だ (口)  
です (口)

指定の助動詞

〔文語〕

我も人たり。  
こゝは女學校なり。

〔口語〕

人だ。人です。  
女學校だ。女學校です。

右の例の文語のたりなりと、口語のだですとは、何れも事物を指し定める意を表すから、これを指定の助動詞といふ。

〔注意〕 だよりは丁寧な言ひ方である。

詠歎の助動詞

なり (文)  
けり (文)

秋の野に人待つ蟲の聲すなり。  
ふりゆくものは我が身なりけり。

右の例のなりけりは何れも詠歎の意を表すから、これを詠歎の助動詞といふ。詠歎の助動詞は文語特有のものである。

比較の助動詞

比較の助動詞

〔文語〕

如し (文)

やうだ (口)  
やうです (口)

〔口語〕

雪のやうだ。

雪のやうです。

流れるやうだ。

流れるやうです。

歲月は流るゝ(が)如し。

右の例の文語の如しと、口語のやうだやうですとは、何れも事物を比較する意を表すから、これを比較の助動詞といふ。

〔注意〕 やうだやうですは推量・比較の二様に用ひられるが、これは何れもその意味によつて區別すべきである。

以上述べた助動詞は主に活用するものであるが、その活用形は卷末の「助動詞活用一覽表」に示してある。



練習

- 一 次の文から助動詞を抜き出して、その種類を説明しなさい。
- (イ) 過ぎたるは猶及ばざるが如し。比して
  - (ロ) 人に問はるゝ時にはいかゞ答へむ。時
  - (ハ) 殿下は自ら兵卒を訓練せさせ給ふ。指定
  - (ニ) はや曉あかつき近くなりぬれば、直ちに起き出でたり。打消
  - (ホ) 何事にも猥たぶりに人に任すまじきものなり。指定
  - (ヘ) まるで雲を掴むやうな話です。指定
  - (フ) 皆さんにお目にかかりたいなりました。時
  - (チ) 運動した後に本を讀ませるのがよいと思ひます。専断
  - (リ) 事實を率直に申すと、人間はパンがなくては生きられませぬ。可能打消
  - (ヌ) 自分の力の足りない時には、人はいろくさもしい心を起すものだから注意を要する。指定

時の助動詞の用法

現在

第十章 文語助動詞の用法

雨降る。  
馬走る。

右の例の降る走るは、動作の現在行はれてゐることを表す。

(二) 次の文から活用する單語を抜き出しなさい。

- (イ) 時は得難く、失ひ易し。打消
- (ロ) 彼はいづち行きけむ尋ね聞かまほし。指定
- (ハ) 古の奈良の都の八重櫻、今日九重にほひぬるかな。打消
- (ニ) 吾人はこれを見て反省するところなかるべからず。打消
- (ホ) 學生たるものは大いに努力して己の初志を貫くべし。指定
- (ヘ) お手紙を頂いて誠に嬉しうございます。指定
- (ト) 貴い國に生れながら、國體を知らないのは恥辱です。指定



鳥飛が  
水流る  
ぬたり

りたぬつ  
り

現在完了

けき  
り

過去

風吹き且つ雨降り

つぬたり

風吹き且つ雨降り

弓術大會を舉行せり

右の例のやうに、現在を表す動詞につぬたりりが結びつけば、動作が現在完了したことを表す。

右の四つの助動詞の中、つぬたりは凡べての動詞の連用形に、りは四段活用の已然形とサ行變格活用の未然形とに結びつく。

月曜日に大掃除を行ひ

きけり

右の例のやうに、現在を表す動詞にきけりが結びつけば、動作が過去に起つたことを表す。

過去を表すきけりは、凡べての動詞の連用形に結びつく。たゞし、きは、カ行變格活用とサ行變格活用との動詞には、次のやうに結びつく。

活用の種類	動詞	活用形	未然形	連用形
カ行變格	(來)	こ	しか	きしか
サ行變格	(爲)	せ	しか	しき

こし ことしかたゆくすゑを思ふ。  
 こしか 急ぎこしかど及ばざりき。  
 さし 急ぎしかたゆくすゑを思ふ。  
 さしか 急ぎさしかど及ばざりき。  
 せし 無禮をせしは我の過なりき。



過去完了

せしか 行かむとせしかど許されざりき。  
しき 直ちに敵を襲撃せむとしき。  
つぬたりりに、過去を表すきけりが重なれば、動作が過去に完了したことを表す。

(一) 溺れし子を救ひ

てき  
てけり

(二) 春も半ばは過ぎ

にき  
にけり

(三) 敵は逸早く逃げ

たりき  
たりけり

(四) 皇軍は敵を滅せ

りき  
りけり

右の中、(三)以外は現代文では殆ど用ひられない。

む

やがて夏も來む。

今宵は母も歸らむ。

未來

右の例のやうに、現在を表す動詞の未然形にむが結びつけば、動作が未來に起ることを表す。

未來完了

更につぬたりに、未來を表すむが重なれば、動作が未來に完了することを表す。

(一) 風吹きぬべし、御船かへしてむ。

(二) やがて櫻の花も桃の花も散りなむ。

(三) 雨降り出でたらむ折は、出發を中止すべし。

右の中、(三)以外は現代文では殆ど用ひられない。

その他の助動詞と用言との接続

以上は時の助動詞の用法であるが、その他の助動詞が用言に接続する法則は、次の表に示すやうである。



活用の種類	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に
ラ行變格	居ら	居り	居り	居る
ナ行變格	死な	死に	死ぬ	死ぬる
四段	讀ま	讀み	讀む	讀む
上一段	見	見	見る	見る
上二段	起き	起き	起く	起くる
下一段	蹴	蹴	蹴る	蹴る
下二段	捨て	捨て	捨つ	捨つる
カ行變格	こ	き	く	くる
サ行變格	せ	し	す	する
	する	しむ	らむ	らむ
	ざる	けむ	らし	らし
	らる	たし	まじ	まじ
	まほし	べし	べかり	べかり
	さす	べかり	なり	なり
	まほし	が) 如し		

右の表によれば、  
 るすは、四段活用ナ行變格活用ラ行變格活用の動詞の未然形に結  
 びつく。

らるさすは右の活用以外の動詞の未然形に結びつく。  
 しむずざりじまほしは、凡べての動詞の未然形に結びつく。  
 けむたしは、凡べての動詞の連用形に結びつく。  
 らむらしまじべしべかりは、動詞の終止形に結びつく。たゞし、ラ  
 行變格活用の動詞には連體形に結びつく。  
 なりは、凡べての動詞の連體形に、如しは直接に、または助詞がを挿  
 入して、凡べての動詞の連體形に結びつく。

右の外、指定の助動詞のたりは體言だけに結びつく。

此等の法則は、主に動詞と助動詞との接續に關するものであるが、  
 獅子は駱駝よりも強きなり。  
 空の様もいと長閑かなりき。  
 今より奮發せざるべからず。

右の例のやうに、形容詞または形容動詞と助動詞との接續、助動詞



相互の接續などに於ても、その法則は別に變らない。

練習

一次の文によつて用言と助動詞との接續を説明しなさい。

- (イ) 日も既に暮れてけり。
  - (ロ) 立錐の餘地も無かりき。
  - (ハ) 終日業務を取扱はしむ。
  - (ニ) 朝顔の花も美しく咲けり。
- 二次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。
- (イ) かゝる過は再びせまじ。
  - (ロ) 年老いて氣力大いに衰へり。
  - (ハ) 品物に手を觸るゝべからず。

サ変  
ラ変

接續するのう  
サ変ラ変の修正形

第十一章 口語助動詞の用法

口語助動詞と用言との接續

口語助動詞と用言との接續は次の表に示すやうである。

活用の種類	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に
四段	讀ませる	読みた(た)	読むまい	読む(の)だ
上一段	起きられる	起きたい	起きる	起きる(の)です
下一段	捨てさせるぬ(ん)	捨てます	捨てるらしい	捨てるやうだ
カ行變格	こ	さうだ	くる	くる
ナ行變格	しせ	さうです	する	するやうです

右の表の中、たが四段活用の動詞に結びつく時には音便で讀んだのやうになり、まいは四段活用にはその終止形に、その他の動詞に



はその未然形に結びつく。  
また口語のサ行變格の未然形では、しにぬ、せにない、まいは結びつかない。

練習

- (一) 次の文から助動詞を抜き出して、用言との接續を説明しなさい。  
(イ) 風が風いだやうです。 *風(イ)る*と云ふ動詞、連体形にやうです
- (ロ) この川は水が浅からう。  
(ハ) 父が子供に本を讀ませる。  
(ニ) どうもあの人は來ないらしい。*來(ニ)ない*と云ふ形容詞の終止形にうらしい
- (ホ) そんな事は人に語りたくない。*語り(ホ)たい*と云ふ動詞の本然形にない
- (ヘ) この頃は悪い病氣がはやるさうだ。*は(ヘ)やる*と云ふ動詞の連用形にやうだ
- (二) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

- (イ) 聊か愚見を述べやう。*述べ*
- (ロ) あなたに一任しませやう。
- (ハ) こんなに面白い本はなかるうと思ふ。

第十二章 助詞の用法

條件の助詞

● 條件の助詞

〔文語〕

- (一) 雨降らば行かじ。
- (二) 水清くば泳がむ。
- (三) 呼ばずば來らじ。
- (四) 雨降れば中止す。
- (五) 風吹けば花散る。

〔口語〕

- 雨が降れば行くまい。
- 水が清ければ泳がう。
- 呼ばなければ來まい。
- 雨が降れば中止しよう。
- 風が吹けば花が散らう。

ば(文・口)

右の例の中文語のばは、(一)(三)のやうに活用する語の未然形に結び



あめ

雨降るは行めど  
未然形  
雨降るは行めど  
三形  
雨降るは行めど

ついで、假定の條件を表し、(四)のやうに、已然形に結びついて確定の條件を表す。たゞし、口語では、何れも假定形だけに結びついて假定の條件を表す。

〔文語〕

雨降るとも行かむ。  
水溢るとも驚かじ。  
いかに山高くとも登らむ。

〔口語〕

雨が降つても行かう。  
水が溢れても驚くまい。  
どんなに山が高くても登らう。

とも (文) 右の例のやうに、文語のともは動詞の終止形または形容詞の未然形に結びついて假定の條件を表す。  
ても (口) 口語では、ともとなつて活用する語の連用形に結びついて假定の條件を表す。

〔文語〕

〔口語〕

ども (文) 右の例のやうに、文語のどもは活用する語の已然形に結びついて確定の條件を表す。  
けれど (口) 口語では、けれどともとなつて活用する語の終止形に結びついて確定の條件を表す。

禁止の助詞

〔文語〕

汝はこゝに居るな。

〔口語〕

居るな。

よく見れ  
見えぬ

よく見る  
見えない

水清けれ  
泳がず

水が清い  
泳がない

呼びたれ  
應へず

呼んだ  
應へない



な(文・口)

妄りに人を笑ふな。  
近く寄つて過すな。

笑ふな。  
するな。

右の例のやうに、文語の禁止の助詞なは、行變格活用の動詞には連體形に、その他の動詞には終止形に結びつく。  
口語の場合の用法も、文語の場合の用法と同じであるが、口語では、文語のラ行變格活用の動詞は四段に活用するから、口語の禁止の助詞なは、凡べての動詞の終止形に結びつく。

疑問の助詞

㊦ 疑問の助詞

〔文語〕

花ありやなしや。  
花あるかなきか。  
鹿の音を聞きたりや。  
鹿の音を聞きたるか。

〔口語〕

あるかないか。  
聞いたか。

や(文)  
か(文・口)

右の例のやうに、文語では、疑問の助詞やは活用する語の終止形に、かはその連體形に結びつく。  
口語では、かだけが疑問の意を表す。  
汝は誰なるか。  
答幾何なるか。  
甲乙いづれを取るか。

右の例のやうに、誰幾何いづれなどの疑問の語が上にある場合には、通常かを用ひて文を結ぶ。

反語の助詞

㊧ 反語の助詞

〔文語〕

や(文)  
か(文・口)  
悔ゆともかひあらむや。  
母に對し何をか隠さむ。

〔口語〕

そんなことがあるものか。  
今日中に出來ますものか。  
右の例のやうに、文語のやか、何れも文の意味を轉ずるから、これ



人唐をむ明の取

物あはれは秋

こも勝る人

やは (文)  
かは (文)

係結の助詞

みずの ちの野の山

夜中まのとのみどあま

そりける

散りぬればふふと

ふそきもそと

櫻折らば折るめ

を反語の助詞といふ。

口語ではかだけが反語の意を表す。

呼ぶとも應へんやは。

かゝるよき折のまたとあるべきかは。

右の例のやうに、やはかはも反語の助詞で、やかよりは一層意味が強い。此等は文語特有のものである。

⑤ 係結の助詞

〔文語〕

よくぞ歸りし。

心なむ正しかりける。

夜や更けぬる。

汝は誰とか遊べる。

このたびこそ成功せめ。

〔口語〕

誰ぞ来てほしい。

○

何かありませう。

ようこそ来て下さいました。

ぞ (文)  
なむ (文)  
や (文)  
か (文)  
こそ (文)

並列の助詞

と (文・口)

上文を受ける助詞

右の例の文語のぞなむやかこそは何れも文の結に關係を及ぼすから、これを係結の助詞といふ。上にぞなむやかがある時には必ず連體形で文を結び、こそがある時には、必ず已然形で文を結ぶべきである。

口語では、右の下段のやうに、ぞかこそなどが用ひられても、文の結には何等の關係も及ぼさない。

〔注意〕 なむやは文語特有の助詞である。

⑥ 並列の助詞

〔文語〕

月と花とを賞す。

右の例のとは事物を並列する場合に用ひられ、語句ごとに添へられる。

〔口語〕

私は甥と姪とを訪ねる。

⑦ 上文を受ける助詞

第二篇 單語(二) 第十二章 助詞の用法

今...  
さ...  
と...  
と...  
と...







ハ吹きあり 雨さへ降る。  
こころに居るもの蜂  
さへす  
助詞

未然形 願望  
散るをむ  
連用形  
散りなむ  
助動詞

ままのまのまをま

だに (文)  
すら (文)  
さへ (口)  
でも (口)  
さへ (文)

〔文語〕

片影だに見えず。  
一錢だに與へず。  
禽獸すら恩を知る。  
鳩にすら三枝の禮あり。

〔口語〕

片影さへ見えない。  
一錢でもやらない。  
禽獸さへ恩を知る。  
鳩にでも三枝の禮がある。

右の例のやうに、文語のだにすらは或物を舉げて他を類推させる意を表す。

〔文語〕

風吹き荒れ、雨さへ降る。  
暑さ烈しく、蚊さへ多し。

〔口語〕

風が吹き荒れ、雨まで降る。  
暑さが烈しく、蚊まで多い。

右の例のやうに、文語のさへは、あるが上になほ物の添ひ加はる意を表す。

まで (口)  
願望の助詞

ばや (文)  
なむ (文)

口語では、文語のさへに對してまでを用ひる。  
◎願望の助詞

蟲の音を尋ね歩かばや。  
峰の櫻よ、あすは咲かなむ。  
右の例のばやなむは何れも願望の意を表し、活用する語の未然形に結びつく。此等は文語特有の助詞である。

練習

- (一) 次の文の傍線を施した助詞の用法を説明しなさい。
- (イ) 來らば來れ、恐れむやは。互語
- (ロ) 月の夜半こそ心の底も澄み渡るものなれ。ヤリ
- (ハ) かれ老いたりとも戰場に臨まば必ず壯者を凌がむ。ヤリ
- (ニ) 寺町を南へ四條を西へ進めば、北側に宏壯なる建物あり。ヤリ

わか宿の花見がころに  
車は朝を後に  
このころに



- (ホ) そんな無理なことがあるものか。
  - (ヘ) 水の中は冷たいけれども、あがるとなほ寒い。
  - (ト) 金さへあればどこへ行つても不自由はしない。
  - (ニ) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。
  - (イ) 雨降り、雷だに鳴り出でたり。
  - (ロ) 學びてこそ人たるかひあらむ。
  - (ハ) 成績悪しとも、失望するに及ばじ。
  - (ニ) 當日雨天なれば、順延と心得るべし。
  - (ホ) 一分の時さへ空しく過すべからず。
- (イ) 雨降り、雷だに鳴り出でたり。(イ) 雨降り、雷だに鳴り出でたり。(イ) 雨降り、雷だに鳴り出でたり。
- (ロ) 學びてこそ人たるかひあらむ。(ロ) 學びてこそ人たるかひあらむ。(ロ) 學びてこそ人たるかひあらむ。
- (ハ) 成績悪しとも、失望するに及ばじ。(ハ) 成績悪しとも、失望するに及ばじ。(ハ) 成績悪しとも、失望するに及ばじ。
- (ニ) 當日雨天なれば、順延と心得るべし。(ニ) 當日雨天なれば、順延と心得るべし。(ニ) 當日雨天なれば、順延と心得るべし。
- (ホ) 一分の時さへ空しく過すべからず。(ホ) 一分の時さへ空しく過すべからず。(ホ) 一分の時さへ空しく過すべからず。

### 第十三章 現代文の助動詞についての注意

時の助動詞  
き (文)

● 時の助動詞——過去の助動詞の終止形きを用ひる場合に、現代文では、

彼も歌をよみて師の君に奉りし。

のやうに、しを用ひることもある。(文法上許容ス)

サ行四段活用の動詞例へば費しを過去の助動詞のしに連ねて費ししとすべき場合に、現代文では、

僅かに一時間を費せしのみ。

のやうに、ししをせしとすることもある。(文法上許容ス)

● 使役の助動詞——さすが、サ行變格活用の動詞例へば周旋すに結びついて周旋せさすとなるべき場合に、現代文では、略して、

友人に土地を周旋さす。

のやうに、せさすをさすとすることもある。(文法上許容ス)

しむが下二段活用の動詞得に結びつく場合には得しむとすべきを、この語に限つて、現代文では、

最優等者にのみ褒賞を得せしむ。

使役の助動詞  
さす (文)

しむ (文)



受身の助動詞  
らる (文)

のやうに、しむをせしむとすることもある。(文法上許容ス)  
●受身の助動詞——らるが、サ行變格活用の動詞、例へば罪すに結びついて、罪せらるとなるべき場合に現代文では、  
法を犯せば直ちに罪さるべし。  
のやうに、せらるをさるとすることもある。(文法上許容ス)

練習

次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

- (一) 左翼軍をして敵を攻撃させたり。
- (二) 生前の功勞者に褒状を得せしめたり。
- (三) 試験に合格ししを以て入學を許可さる。
- (四) これを聞きて涙を落せしもの多かりき。
- (五) その結果の等しかりしを見て歡喜に堪えざりし。

此の除け名エウ字  
ものと言ふ傳り

條件の助詞  
とも (文)

とも (文)  
ども (文)

第十四章 現代文の助動詞についての注意

●條件の助詞——ともは、動詞の終止形、形容詞の未然形に結びつくべきであるが、現代文では動詞には、

直に出發するとも及ばじ。

數百年を経るとも變らじ。

のやうに連體形に結びつくこともある。(文法上許容ス)

ともどもの代りとして、現代文では、

何等の事由あるも(ありとも)、議場に入ることを許さず。

期限は今日に迫りたるも(たれども)、準備は未だ成らず。

のやうに、もを用ひることもある。たゞし、

請願書は會議に付するも(すれども)、これを朗讀せず。

給料は低きも(けれども)、應募者は多かるべし。



疑問の助詞  
や (文)

のやうに、誤解を生ずる時には用ひない。(文法上許容スベキ事項第十五)

㊦ 疑問の助詞 やは活用する語の終止形に結びつくべきであるが、現代文では、

父に似たるや母に似たるや。

のやうに、連體形に結びつくこともある。(文法上許容スベキ事項第十)

上に疑問の意を表す語例へば誰如何などがあつても、現代文では、

誰にや問はん。

如何にすべきや。

のやうに、やを用ひることもある。(文法上許容スベキ事項第十四)

並列の助詞  
と (文)

㊧ 並列の助詞 とは語句ごとに用ひるべきであるが、現代文では、

月と花を賞す。

父と母に相談す。

のやうに、誤解の起らない場合には、最後のとを省くこともある。

たゞし、  
史記と漢書の列傳を読む。  
のやうに、

史記と漢書との列傳を読む。  
史記と漢書の列傳とを読む。

と意味が二様に解かれる場合には省かない。(文法上許容スベキ事項第十三)

上文を受ける  
助詞  
と (文)

㊨ 上文を受ける助詞 この助詞のとは通常活用する語の終止形に結びつくべきであるが、現代文では、

月出づると見えて……。

終日業務を取扱はしむるといふ。

のやうに、上に係結の助詞がなくても、連體形に結びつくこともある。(文法上許容スベキ事項第十二)



練習

次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

- (一) 甲と乙の差幾何なるや。
- (二) 洋服地と帽子の見本を送れ。
- (三) 人皆彼の徳を稱へけるとぞ。
- (四) 價は高きも買ふ人は多かるべし。
- (五) 彼は今年も試験を受くるといふ。
- (六) 八時より出發するとも、恐らく後るゝことはあるまじ。

第十五章 紛れ易い品詞

多くの單語の中には、語形が同じで、その所屬の品詞を異にするものがあり、また、同じ品詞の中で種類を異にするものがあつて、品詞

なりの區別

の分類上極めて紛れ易いから、次にその主なものを説明しよう。

● なりの區別

- (一) 讀書の好時節となりぬ。
- (二) 彼は我を欺きたるなり。
- (三) 寝るなり起きるなり、あなたの御自由です。

右の例のなりの中、(一)は動詞、(二)は活用する語の連體形に結びつく指定の助動詞、(三)は口語特有の並列の助詞である。

● たりの區別

- (一) 春の海洋々たり。
- (二) 彼も人たり、我も人たり。
- (三) 主人はいたく寝入りたり。

右の例のたりの中、(一)は形容動詞の活用語尾、(二)は體言に結びつく指定の助動詞、(三)は動詞の連用形に結びつく時の助動詞である。

たりの區別



ぬの區別

③ぬの區別

- (一) 轉ころばぬ先むの杖。
- (二) 一夜の間に灰かいじん燼じんとなりぬ。

右の例のぬの中、(一)は動詞の未然形に結びつく打消の助動詞ずの連體形(二)は動詞の連用形に結びつく時の助動詞である。

なの區別

④なの區別

- (一) 我を忘るな。
- (二) 彼も老いけるよな。
- (三) 烈しき風吹きなば、この木も倒れぬべし。

右の例のなの中、(一)は動詞の終止形に結びつく禁止の助詞、(二)は感歎の意を表す助詞、(三)は動詞の連用形に結びつく時の助動詞ぬの未然形である。

なむの區別

⑤なむの區別

- (一) 疾とく花も咲かなむ。
- (二) やがて花も散りなむ。
- (三) 櫻をなむ見に行きける。

右の例のなむの中、(一)は動詞の未然形に結びつく願望の助詞、(二)は散つてしまはうの意で、二つの單語から成り、なは動詞の連用形に結びつく時の助動詞ぬの未然形、むは未來の意を表す時の助動詞、(三)は係結の助詞である。

⑥しかの區別

- (一) かくこそ思ひしか。
- (二) いつ頃歸宅せしか。

右の例のしかの中、(一)はこそその結で、時の助動助きの已然形、(二)は二つの單語で、しは時の助動詞きの連體形、かは疑問の助詞である。

しかの區別



練習

次の文の傍線を施した部分を説明しなさい。

- (一) 人たる道。
- (ロ) 行きたる人。
- (二) 父に叱責せらる。
- (ロ) 閣下には日々運動せらる。
- (ハ) こゝよりも試合を見らる。
- (三) 何事も無かりしか。
- (ロ) 昨日こそ早苗とりしか。
- (四) 汝は傘を持参すべし。
- (ロ) 今日は傘も不用なるべし。
- (五) その謀空しくなりぬ。
- (ロ) 今これを説明するなり。

紛れ易い品詞

- (六) 妹に本を讀ませたり。
- (ロ) 殿下も本を讀ませ給ふ。
- (七) 花も咲かなむ。
- (ロ) 花見にとてなむ出で行きける。
- (ハ) 死にし子顔よかりき。
- (ロ) 露と消えにし命かな。
- (九) 悔ゆともかひあらむや。
- (ロ) さるためし古にありやなしや。
- (五) 來ぬ人を待つ。
- (ロ) はや今年も暮れぬ。



第三篇 文章

第一章 文の成分

厚始時代には今と衣々居住  
といふものけふふかふか  
い等にてつこしをそりてけつひこと  
文字一語一詞一夫  
大語 (小語) (章)

鳥 啼く。

山 高し。

右の例の傍線を施したものは前に述べたやうに、それら文法上  
言語の単位として取扱はれるものであるから、單語である。

鳥 啼く。

山 高し。

右の例の傍線を施したものは、前に述べたやうに、それら單語が  
集つて一つの纏まつた思想を表してゐるから文である。

主語 述語

● 主語 ● 述語

今日春日和り  
今日は結構な小春日和  
和り  
大の中へ主語  
説明と述  
述語(説明語)  
各分は体大なり  
主部 述部  
文  
主語+客語+修飾語  
+述語(普通文章)

右の文で、鳥山風が花がは何れも文の主題となり、啼く高し吹く美  
しいは何れも主題の動作有様などを述べてゐる。かやうに、文の  
主題となるものを主語といひ、主題の動作有様などを述べるもの  
を述語といふ。

注意 述語は主題の動作有様などを説明するから説明語ともいふ。

星 稀なり。

平和は 來れり。

風ばかり 吹いてゐる。

右の例の傍線を施したもののやうに、主語は、體言が單獨か、または  
助詞と結びついたものから成る。

過ぎたるは 及ばざるが如し。

生れたのは 女の子であります。

右の例の傍線を施したもののやうに、體言の如く用ひられたもの



文の成分  
接詞語

論語 十直中書

そうと大書と書

おれれ平あがり一ゆ

独立語

も主語となる。

人 来る。

花は 咲かざりき。

月が 出ましたね。

右の例の傍線を施したもののやうに、述語は、用言が、單獨か、または 助詞や 助動詞と 結びついたものから成る。

汝は 誰ぞ。

聲 雷の如し。

孔子は 聖人なり。

右の例の傍線を施したもののやうに、體言と 助詞や 助動詞と 結びついたものも 述語となる。

大雨 降り来る。

風も 吹きやむ。

子が 泣き叫ぶ。

右の例の傍線を施したもののやうに、動詞の 重なつたものも 述語となる。

太郎も次郎も 登校せり。

植物は 發生し成長し枯死す。

太郎も次郎も三郎も 運動し勉強する。

右の例の傍線を施したもののやうに、一つの文の中に、主語も 述語も二つ若しくは二つ以上あることもある。

客語

犬 門を 守る。

子供が 笛を 吹く。

右の例の述語は何れも他動詞であるから、門を、笛をのやうな目的を表す語を入れねば、文の意味が完全にならない。

飛行機を飛ばす  
敵軍河をわさる

客語



病は 口より 入る。  
歳は 十五に なる。

右の例の述語は何れも自動詞であるが、口より十五にのやうな標準を表す語を入れねば、文の意味が完全にならない。

以上述べたやうに、文の目的または標準を表すものを客語といふ。客語は前に挙げた例のやうに、主に體言に助詞をによりなどの結びついたものである。

馬(を) 繋ぐべからず。

樹木(を) 折り取るべからず。

右の例のやうに、客語は助詞をを省略することもある。

強きは 弱きを 苦しむ。

老人が 若いのに 扶けられる。

右の例の傍線を施したもののやうに、體言の如く用ひられるもの

落葉を(客語)

寸金と人(は)言(は)り

錦も我(は)度(を)敷(き)

つめぬ

副修  
形修

修飾語

も客語となる。

先生 生徒に 裁縫を 教ふ。

父が 子供に 名を 太郎と つけた。

右の例の傍線を施したもののやうに、一つの文の中に、客語が二つ若しくは二つ以上あることもある。

四 修飾語

水 甚だ清し。

面白い話がある。

右の例の甚だは清しを修飾し、面白いは話を修飾する。かやうに、他の語を修飾するものを修飾語といふ。

修飾語は主に次のやうなものから成る。

一 形容詞または形容詞の如く用ひられるもの

修飾語(副修) 清き水 流る。

第三篇 文章 第一章 文の成分

主語ト述語(見相)

修飾限定(修飾語)

主語 鉄の立目がちとどき

と清く

主語

主語 蝶々

主語 蝶々

形容詞的修飾語 (形修)



(形容詞的修飾語)

輝く入日、美しや。

これは面白くない話だ。これから東があなたの屋敷です。

右の例のやうに、體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふこともある。

(二) 副詞または副詞の如く用ひられるもの。

水勢殊に激し。

英語を怠らず學ぶべし。

雲は墨のやうに黒い。

運動會が昨日ありました。

右の例のやうに、體言以外のものを修飾するものを副詞的修飾語といふこともある。

右に挙げた修飾語は極めて簡單なものばかりであるが、多くは次

(副詞的修飾語)

のやうに複雑なものである。

花を見る人、群集せり。

風頗る烈しく吹けり。

私の家の前の櫻が非常に綺麗に咲いた。

右の例の中、(一)は客語を持つものが修飾語となつたのである。

(五) 接續語

私は東京に行き、また彼は京都に行つた。

彼は仁者なり。然るに不幸に遭へり。

右の例のまた、然るに、のやうに、節または文を接續するものを接續語といふ。接續語は接續詞から成る。

(六) 獨立語

あはれ、今日も暮れぬ。

○節とは、文が他の文の一部となつたものをいふ。

獨立語



文の成分

おや、兄さん、あなたも見物に行きますの。  
右の例のあはれ、おや、兄さんのやうに文の主要部から獨立するものを獨立語といふ。獨立語は感動詞及び呼掛の語から成る。

以上述べた主語・述語・客語・修飾語・接續語・獨立語のやうに、文を構成する要素を文の成分といふ。

練習

次の文を文の成分に分けなさい。

- (一) 艱難汝を玉にす。
- (二) 眠れる狐は鳥を捕へず。
- (三) 苦樂は車の兩輪の如し。
- (四) 婦人は家庭の改善に努力すべし。

言語の羅列は  
序の常

文の成分の正序

第二章 文の成分の正序及び倒置省略

● 文の成分の正序

文の成分は只順序なしに排列されるものでなく、通常次のやうな一定の順序に従ふものである。これを文の成分の正序といふ。

- (一) 主語は述語の上に、述語は主語の下にある。

時は金なり。  
主 述  
飛行機が飛んでゐる。  
主 述

(五) 雲は四時をわかずをかしきものなり。  
(六) 井の中の蛙は大海を知らない。  
(七) 恵ひ人は恵まれる人より幸いです。  
(八) 紫式部は源氏物語を著した才女である。  
(九) 花やおまへはお菓子とそれから砂糖を買つておいで。



(二) 客語は主語と述語との間にある。

兄は陸軍大尉となる。

父は手紙を子に渡せり。

(三) 修飾語は被修飾語の上にある。

都會の生活は危険なり。

私は大聲で獨唱します。

(四) 接續語は接續すべき語句または文の間にある。

生徒は國語及び漢文を學べり。

彼は文を學び且武を練る。

(五) 獨立語は文の首位にある。

すはや敵軍寄せ來る。

あれ自動車が來た。

文の成分の倒置

● 文の成分の倒置

文の成分は、場合によつては、言葉の調子を整へ、若しくは文の意味を強めるために、成分の位置を置き換へることがある。これを文の成分の倒置といふ。

(一) 主語・述語の倒置

悠々たるかな天地。

強いですね、あなたは。

(二) 客語の倒置

何を汝は買ひしぞ。

いくつになつたかお前は。

(三) 修飾語の倒置

花も咲きけりみ吉野の。



一 私も驚きましたね多少は。

四 獨立語の倒置

二 續けものども。

一 行きませう、さあ。

略文の成分の省

三 文の成分の省略

文の成分は何れも文を構成する上に必要なものばかりであるが、これを省略しても誤解の生じない場合には、文を簡潔にし、若しくは語勢を強めるために、或成分、または或成分の主要でない部分を省略することがある。これを文の成分の省略といふ。

一 主語の省略 ちよとと 取らん 行そ まも す

(誰も)此の土手に登るべからず。

え、(私は)口惜しい。

心算は分明(母)り  
の窮きんは(月)す

二 述語の省略

皆さんこちらへ。(お)出で下さい。

兄は京都へ、(行き)弟は大阪へ行つた。

三 客語の省略

犯人は直ちに(警官に)捕縛せられたり。

私は入學を(學校長に)許可されました。

私は英語を少しも知りません。あなたはうまく(それをお)やりでせう。

以上は何れも文の或成分を省略したものであるが、この外、次のやうに、二つ以上の成分または成分の主要でない部分を省略することもある。

敵軍來れり。(予)は直ちに(部下をして)(これを)攻撃せしめん。

私は繪本を買つた。それから妹も(繪本を)買つた。



右の例は二つ以上の成分を省略したものである。

樂は苦の種(なり)苦は樂の種(なり)

昔は昔(だ)今は今(だ)

右の例は成分の主要でない部分を省略したものである。

練習

(一) 次の文の成分を通常の位置に置き換へなさい。

逆語 (イ) たなびきそめぬ花の雲。

各語 (ロ) 諸子の健康を祈は切に祈る。

(ハ) 降る雪にきこりの道も埋れけり。

(ニ) おそくも來月は父も歸りませう。

(ホ) あなたは御承知ですか、この問題の解式を。

(二) 次の文の省略された成分を補ひなさい。

花の雲を祈る。きこりの道も降る雪に埋れけり。父もおそくも來月は歸りませう。おそくも來月は父も歸りませう。あなたは御承知ですか、この問題の解式を。

ナ即

一つの文が他の文の一部と

なり居る

光陰は流

主語節

述語節

客語節

修飾節

主語節

主語節

身體が良いのは頼もしい。

歲月の流るゝは早し。

右の例の傍線を施したもののやうに、文が更に他の文の成分となるものを節といふ。

第三章 節

(イ) 樹木折取るべからず。

(ロ) 堪忍は無事長欠の基。堪忍は無事長欠の甘全なり。

(ハ) 郷に入つては郷に従へ。

(ニ) あなたはどちらへお行きませう。

(ホ) はい、一寸東京までお行きませう。

人々は誰も樹木折るべからず。人々郷に入り郷に従へ。あああなたはどちらへお行きませう。はい一寸東京までお行きませう。



雨が降る夜は淋しい

良草花にまじりてはよき  
言ふ

色は体大なり

日本人は人の多い

人は鶴船の降りて来

引つてはめき

今修飾

修飾節

客語節

松島は景色がよい

修飾節

右の例の傍線を施したもののやうに、主語の地位にある節を主語節といふ。

一 述語節

瀬戸内海は波静かなり。

松島は景色がよい。

右の例の傍線を施したもののやうに、述語の地位にある節を述語節といふ。

二 客語節

乗客は列車の來るを待てり。

聲は猫が鳴くの似てゐる。

右の例の傍線を施したもののやうに、客語の地位にある節を客語節といふ。

三 修飾節

學徳高き人は稀なり。

春が來たが、花が咲かない。

右の例の學徳高きは、人を修飾し、春が來たがはその獨立を失つて下の文を修飾してゐる。かやうな節を修飾節といふ。

四 對立節

夏は暑く、冬は寒し。

髪は亂れ、顔は青く、衣は破れてゐる。

右の例の傍線を施したものは、いづれも對立的に結びついてゐるかやうな節を對立節といふ。

練習

次の文から節を抜き出し、  
一言葉に花咲くものは實歎し。



私達ハ幸福ハ他に求めてあるが

第三篇 文章 第四章 文の種類

- (一) 姉は裁縫を好み、妹は音楽を好む。
- (二) 身體の強きは成功の第一要件なり。主語節
- (三) 観客は花火の上るのを待つてゐる。客語節
- (四) この會社は品行の正しい人を雇ひます。主語節
- (五) 私たちは舟の下るのを眺めてゐました。客語節

### 第四章 文の種類

#### 一 文の構成上の種類

文をその構成の上から分類すると次の三種となる。

#### ● 單文

- 雨降る。
- 落花雪の如し。

一構成上  
二性質上

單文

風が吹けば浪が立つ

複文

生絲と茶とは我が國の重要な輸出品だ。  
生徒は校則を守るべし。  
英國國民は實名を尊び虚名を欲せず。  
兄と弟とは國語と漢文とを某先生に學べり。  
右の例のやうに、主語と述語との關係が文法上の形式に於てたゞ一回だけ成立する文を單文といふ。

#### ● 複文

彼は性質温良なり。  
生あるものは必ず滅す。  
良薬口に苦しとは有名なる諺なり。  
多くの人は己の愚なるを知らず。  
物價が騰貴すると、細民が生活に困る。ツリ節が未だ場合  
右の例のやうに、對立節以外の節を含む文を複文といふ。

第三篇 文章 第四章 文の種類



重文

◎重文

天高く、地低し。

言ふは易く、行ふは難し。

月明かに、にてにして、星稀なり。

砂は白く、松は青い。

木は倒れ、瓦は碎け、壁は落ち、家は傾いてゐる。

右の例のやうに、對立節を含む文を重文といふ。

ニツ以上ノ節カ出テ来ル場合

以上は單文複文重文の説明の大要であるが、時には、次の例のやうに、此等が混合して複雑な形をとることがある。

花咲き鳥啼く春は樂しきものなり。 (重文を含む複文)

花咲く春は暖かく、雪降る冬は寒し。 (複文が對立する重文)

花咲き鳥啼く春は樂しく、霜牙え雪

国破れて山河あり  
城春にして草青み  
たり

降る冬は寂し。

(重文を含む複文が對立する重文)

練習

次の文を構成上から分類しなさい。

(イ) 能ある鷹は爪をかくす。 複文

(ロ) 色美しき寶石はその價概ね高し。 複文

(ハ) 氣候順調なりしかば、收穫も豊かなりき。 複文

(ニ) あはれ、我が運命もこれにて定まれるか。 複文

(ホ) 雨は降るし、風は吹くし、それに道まで悪かつた。 複文

(ヘ) 日の丸の國旗は日本人の明い淨い正しい心の象徴である。 複文

(ト) 停車場は下りる人もあり乗り込む人もあつて、非常に混雑してゐました。 複文



二 文の性質上の種類

文をその性質の上から分類すると次の四種となる。

一 平敘文

健全なる精神は健全なる身體に宿る。

月は地球の周圍を廻轉す。

秋には人を壓しつけるやうな寂しさがある。

右の例のやうに、思想をすなほに敘述する文を平敘文といふ。

二 疑問文

諸子は嘗て文法を學びしことありや。

願つたら先生が許して下さるでせうか。

空中を支配する時代も來りしにあらざや。

右の例のやうに、疑問または反語の意を表す文を疑問文といふ。

三 命令文

時のある時に時を得よ。

今日思考して明日語れ。

長いものには巻かれよ。

右の例のやうに、命令の意を表す文を命令文といふ。

四 感歎文

今日九重に匂ひぬるかな。

世に處するもまた難いかな。

あゝ、あつばれな勇士だ。

右の例のやうに、感歎の意を表す文を感歎文といふ。

練習

次の文を性質上から分類しなさい。

(イ) かく情ある人もありけるよ。感歎文

感歎文

平敘文

疑問文

命令文



- (ロ) 道路は必ず左側を通行せらるべし。命令文
- (ハ) 問ふは當座の恥にして、問はぬは一代の恥なり。平叙文
- (ニ) 人も學びて後にこそ、まことの徳はあらはるれ。平叙文
- (ホ) 文藝の委員には誰が適任でせう。疑問文
- (ヘ) まあ、久しくお顔を見せませんでしたね。感歎文
- (ト) 午後五時までには必ずいらつしやいませ。命令文

# 女子現代日本文法

終

## 附 録

### 文法上許容スベキ事項

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ、「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

(例) 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五、「セサス」トイフベキ場合ニ、「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 手習サス。

周旋サス。



賣買サス。

「<sup>三</sup>、セラル」トイフベキ場合ニ、「<sup>三</sup>、サル」ト用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 罪サル。

評サル。

解釋サル。

「<sup>七</sup>、得シム」トイフベキ場合ニ、「<sup>七</sup>、得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

(例) 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

「<sup>八</sup>、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」「ナドイフベキ場合ヲ、暮セシ時」「過セシカバ」「ナドトスルモ妨ナシ。

(例) 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

「<sup>六</sup>、てにを」ハ、「<sup>六</sup>、ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

「<sup>三</sup>、疑ノてにを」ハ、「<sup>三</sup>、ヤ」ハ、動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

「<sup>二</sup>、てにを」ハ、「<sup>二</sup>、トモ」ハ、動詞・使役ノ助動詞、及、受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣

アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

「<sup>三</sup>、てにを」ハ、「<sup>三</sup>、ト」ハ、動詞・使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及、時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。



終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。  
萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをは「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルトキニ限り、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

(例) 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

(最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例)

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳②ヲ讀ムベシ。

四、上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをは「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

(例) 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

五、てにをは「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「ト」モ或ハ「ド」モノ如ク用キルモ妨ナシ。

(例) 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

(誤解ヲ生ズベキ例)

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

六、トイフ「トイフ」語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

(例) イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。



外洋開一覽表

入港名		開港名			
		第一	第二	第三	第四
自	神戶	神戶	神戶	神戶	神戶
	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪
横	横濱	横濱	横濱	横濱	横濱
	東京	東京	東京	東京	東京
神	神戶	神戶	神戶	神戶	神戶
	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪
不	不	不	不	不	不
	安	安	安	安	安



代名詞一覽表

指 示 代 名 詞					人 代 名 詞	
角 方	所 場	物 事				
こ ち ら	こ ち な た	こ こ れ	近	じ わ わ わ ぶ た ら わ ん く は し	自 稱	(口) (口) (文) (文)
そ ち ら	そ ち な た	そ そ れ	中	お ま へ あ な た な ん ぢ	對 稱	(口) (口) (文) (文)
あ ち ら	あ ち な た か な た	あ か れ あ か れ	遠	あ れ あ の か た か か れ	他 稱	(口) (口) (文) (文) (口) (文)
ど ち ら	ど ち ち い づ ち い づ か た	ど い づ く い づ こ い づ れ	不 定	だ れ ど な た た た れ	不 定 稱	(口) (口) (文) (文) (口) (文) (文) (文)







文語・口語動詞活用對照一覽表

サ行變格		力行變格	下二段	下一段	上二段	上一段	ナ行變格	ラ行變格	四段	活用名	語 活用形
(爲)	(來)	忘	(蹴)	起	(見)	死	有	讀	讀	語	
せ	こ	れ	け	き	み	な	ら	ま	ま	語	連用形
し	き	れ	け	き	み	に	り	み	み	語	終止形
す	く	る	ける	きる	みる	ぬ	る	む	む	語	連體形
する	くる	る	ける	きる	みる	ぬ	る	む	む	語	已然形
すれ	くれ	れ	けれ	きれ	みれ	ぬれ	れ	め	め	語	命令形
せよ	こよ	れよ	けよ	きよ	みよ	ぬ	れ	め	め	語	
サ行變格		力行變格	下一段	上一段			四段	活用名	語 活用形		
(爲)	(來)	忘	(蹴)	起	(見)	死	有	讀		語	未然形
し	こ	れ	け	き	み	な	ら	ま	ま	語	連用形
し	き	れ	け	き	み	に	り	み	み	語	終止形
する	くる	れる	ける	きる	みる	ぬ	る	む	む	語	連體形
する	くる	れる	ける	きる	みる	ぬ	る	む	む	語	假定形
すれ	くれ	れ	けれ	きれ	みれ	ぬ	れ	め	め	語	命令形
せよ	こい	れよ	けよ	きよ	みよ	ぬ	れ	め	め	語	

文

語

口

語







表 覽 一 用 活 詞 動 助 語 文

特	用 活 的 詞 容 形				用 活 的 詞 動											活 用 の 種 類				
	打 消	比 較	希 望	打 消	推 可 量	推 可 能	打 消	指 定	時			尊 敬	使 役	尊 敬	受 身		助 動 詞 活 用 形 類			
ず	○	ごとく	まほしく たく	まじく	べく	べから	さら	たら	なら	(ら)	たり	(けら)	な	(て)	しめ	させ	せ	られ	れ	未然形
ず	○	ごとく	まほしく たく	まじく	べく	べかり	ざり	たり	なり	(り)	たり	○	に	て	しめ	させ	せ	られ	れ	連用形
ず	じ	ごとし	まほし たし	まじ	べし	(べかり)	(ざり)	たり	なり	り	たり	けり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	終止形
ぬ	(じ)	ごとき	まほしき たき	まじき	べき	(べかる)	ざる	たる	なる	る	たる	ける	ぬる	つる	しむる	さする	する	らるゝ	るゝ	連體形
ね	(じ)	○	まほしけれ たけれ	まじけれ	べけれ	(べかれ)	され	たれ	なれ	(れ)	たれ	けれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	已然形
○	○	○	○	○	○	○	され	たれ	なれ	(れ)	(たれ)	○	ね	(てよ)	しめよ	させよ	せよ	られよ	れよ	命令形

用 活 格 變 行 ラ ナ 行 變 格 活 用 用 活 段 二 下



表 覽 一 用 活 詞 動 助 語 文

用 活 殊 特		用 活 的 詞 容 形					用 活 的 詞 動										活 用 の 種 類			
推 量	推 時 量	推 時	打 消	比 較	希 望	打 消	推 可 量	推 可 量	打 消	指 定	時				尊 敬	使 役	尊 敬	受 身	助 動 詞 活 用 形 類	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	未 然 形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	連 用 形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	終 止 形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	連 體 形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	已 然 形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	命 令 形

一、( ) 括弧を施したものは、現代文では殆ど用ひない。  
 二、( ) 括弧を施したものは、その内外のいづれを用ひてもよい。  
 三、文語の可能な助動詞には命令形がない。

用 活 格 變 行 ラ ナ 行 變 格 活 用 用 活 段 二 下







口語助動詞活用一覽表

用活殊特														詞容形的			用活的詞動			活用の種類		
比較	推量	推量	希望	打消	指定	打消	推量	時	時	尊敬	希望	推量	打消	使役	△ 可受	△ 敬能身	助動詞	活用				
																	の種類	形				
やうでせ	やうだら	さうでせ	さうだら	たから	なから	○	でせ	だら	○	○	○	○	○	ませ	○	○	○	させ	せ	られ	れ	未然形
やうでし	やうだつ	さうでし	さうだつ	たかつ	なかつ	す	でし	だつ	○	○	○	○	○	まし	たく	らしく	なく	させ	せ	られ	れ	連用形
やうです	やうだ	さうです	さうだ	○	○	ぬ(ん)	です	だ	まい	よう	う	た	ます	たい	らしい	ない	させる	せる	られる	れる	終止形	
やうな	さうな	○	○	○	ぬ(ん)	○	○	○	○	○	○	た	ます	たい	らしい	ない	させる	せる	られる	れる	連體形	
やうなら	さうなら	○	○	○	ね	○	○	○	○	○	○	たら	ますれ	たけれ	○	なけれ	させれ	せれ	られ	れ	假定形	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ませ	○	○	○	させよ	せよ	られよ	れよ	命令形

一、括弧を施したものは、その内外のいづれを用ひてもよい。  
 二、だ・です・なから・たから・さうだ・さうです・やうだ・やうですは、未然形にう、連用形にたを連ねると容易に理解することが出来る。  
 三、口語の可能・尊敬の助動詞れる・られるには命令形がない。







動詞と文語助動詞との接続

未然形に	未然形に	む(ん) る(四段・ナ變・ラ變の動詞に) す(その他の動詞に) らる さす しむ ず ざり じ まほし り(サ變に限る)	未然形に	む(ん) る(四段・ナ變・ラ變の動詞に) す(その他の動詞に) らる さす しむ ず ざり じ まほし り(サ變に限る)
連用形に	連用形に	つ ぬ たり き(カ變・サ變は例外) けり けむ(けん) たし	連用形に	つ ぬ たり き(カ變・サ變は例外) けり けむ(けん) たし
終止形に	終止形に	らむ(らん) らし まし べし べかり	終止形に	らむ(らん) らし まし べし べかり
終止形に	終止形に	なり (が如し)	終止形に	なり (が如し)
連體形に	連體形に	り(四段に限る)	連體形に	り(四段に限る)

動詞と口語助動詞との接続

未然形に	未然形に	う れる せる よう	未然形に	う れる せる よう
連用形に	連用形に	た(だ) ます たい たから	連用形に	た(だ) ます たい たから
終止形に	終止形に	らしい	終止形に	らしい
連體形に	連體形に	やうだ やうです (の)だ (の)です	連體形に	やうだ やうです (の)だ (の)です

左の動詞助の定指  
て形然未の格變行サ  
。いなかつ

注意

るす續接にけだ言體はりたの詞動助の定指

注意



動詞と文語助動詞との接続

未然形に	む(ん) る(四段・ナ變・ラ變の動詞に) す(その他の動詞に) らる さす しむ ず ざり じ まほし り(サ變に限る)	連用形に	つ ぬ たり き(カ變・サ變は例外) けり けむ(けん) たし	終止形に	らむ(らん) らし まし べし べかり	連體形に	なり (が)如し	已然形に	り(四段に限る)
動詞と口語助動詞との接続	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	連體形に	連體形に	連體形に	連體形に	連體形に
未然形に	う れる(四段の動詞に) せる よう られる(四段以外の動詞に) させる ない ぬ(ん) まい(四段は終止形に) なから	連用形に	た(だ) ます たい たから さうだ さうです	終止形に	らしい	連體形に	やうだ やうです (の)だ (の)です	連體形に	

るす續接にの詞助び及言體はすで・だの動詞助の定指  
び結はいま・いなにせぬにしはで形然未の格變行サ  
。いなかつ

注意

るす續接にけだ言體はりたの詞助助の定指

注意







